妖術の観念

妖術についての知識

妖術にはどのような種類のものがあるか、妖術使いがどのような不思議な現象を引き起こすか、どんなふうにして人に術をかけるか、地域の人々はこうした知識にはけっこう詳しい。妖術は人々にとって興味をもって語りうる格好の話題でもある。日本において怖い話や世にも奇妙な物語や犯罪の話に、人々が興味をもち好んで聞き語るのと同じようなものかもしれない。それらは不思議で恐ろしい、あるいはおぞましく唾棄すべき類の行為や出来事であり、しかし同時に人々の関心を惹き魅了する、そうした類の出来事なのである。妖術の話は常軌を逸した怪奇話の要素と、犯罪の要素、近所のゴシップやスキャンダルの要素を兼ね備えている――それは実際顔見知りの隣人が行った、あるいは行いうるおぞましい行為である――ので、この意味での魅力も二倍である。犯罪話やゴシップが、匿名の他人の話としては大いに面白がって語りうるのに、自分が当事者の一人であるとなると、とたんに人は見ず知らずの他人に対して口を閉ざしてしまうように、妖術の話においても、具体的な隣人や親族の名前が登場するような話になると、とたんに人々の口は重くなる。実際、私が具体的な固有名とつなげることができるような形で話を聞けるようになったのは、地域の人々に私が知られるようになって４年以上たってからのことであった（註 妖術話）。

妖術の種類や特徴、妖術使いがどんなふうにして術をかけるか等々を知っているということは、「妖術を知っている kumanya utsai」こととはもちろん全く別の話である。後者は、その人自身が妖術使いであるということを意味してしまう。時代小説に詳しい人なら、忍者が行う様々な技、水遁の術やら変わり身の術やらについて、それがどのようなものか知っていると言えるだろうが、だからといってその人が忍術を知っているということにはならないだろう。それと同じようなものである。この章では、自らを妖術使いだとは考えない普通の人々が、上のような意味で妖術「について」知っていることを紹介したい。

妖術についての知識の網羅的な記述は、ここでは目指していないし、そもそもあまり意味のあることではない。こうした知識は、相互にかならずしも辻褄があっているわけではないし、一貫してもいない。ある意味、突込みどころ満載である。また、それはけっして閉じてもいない。この地域で私がフィールドワークを始めてからすでに 30 年近くが経っているが、その間にさまざまな新手の妖術が登場しては消えている。90 年代の初めに一時は人々を震え上がらせていたカウシャ（kausha）と呼ばれる特殊な妖術（後述）は、今日ではほとんど人々の口に上ることもない。人々が妖術について話すとき真っ先に出てくることが多い――この意味で、彼らにとって妖術という観念で連想される一連のイメージの中核にあるものの一つだといえるだろう――「キブリの妖術（utsai wa chivuri）」（後述）についても、人々はそれが昔の妖術であり、昔はそれを行使する有名な妖術使いが大勢いたが、最近はあまりいないと認めている。妖術使いたちの「本場」とでも言える地域が、ドゥルマ世界の外部――具体的にはタンザニアやモザンビーク――に想定されていること

も、地域的に閉じた体系として妖術を考えることを不可能にしている。強力な術を求める妖術使いたちは、こうした妖術の本場にはるばる出かけていって新たな術を手に入れて帰ってくると考えられているし、妖術使いに対抗する施術師たちもしばしば、自分たちの術（薬）がタンザニアで手に入れたものであることを誇らしげに吹聴する（註 カヤ）。妖術使いが行使すると想像されている術のレパートリーは、常時変化しており、外部起源の「技術革新」にさらされていると考えられている。体系的で、網羅的カタログ的な記述を求めても無駄なのである。
とはいうものの、人々が列挙する妖術の主なものをざっと眺めるだけで、この領域についてのこの社会での想像力のあり方の特徴をうかがい知ることができる。本章で私が試みるのはこれである。

妖術をめぐるイメージの３つの核
妖術とその行使についてのイメージには、方向性や焦点の異なるイメージが混在している。明確に切り離して考えるわけにはいかないが、大まかに３つの方向性を区別できる。（１）高度な知識に基づいた特殊技術の一種という妖術のイメージ、それを所持し駆使する妖術使いというイメージ、（２）おぞましく異常な行為としての妖術のイメージ、異常な性向をもった変態としての妖術使いというイメージ、（３）誰にでもある動機からごく普通の一般人でもつい手を出してしまう――それだけに厄介でもある――日常性の中に潜んだ行為としての妖術のイメージ、の三つがそれである。これらはいずれも地域の人々が妖術について語ったり思い描いたりするさいの核となるイメージである。以下ではそれら一つ一つについて順番に紹介・検討していこう。

ムハッソ（muhaso）と妖術――特殊技術としての妖術
薬の概念
薬の三角形
妖術の観念はムハッソ（muhaso）の観念と切っても切れない関係にある。ムハッソは「薬」の一種である。「薬」とは、ここでは一応、それを適切に処方することによってなんらかの効果をもたらすことができる物質と定義しておこう。ムハッソは、ムレヤ（mureya）と呼ばれることもあ。黒い粉末状で通常は瓢箪や小瓶に保存される。ひまし油や蜂蜜などと混ぜて黒いどろりとした液状で瓢箪に入れられている場合もある。妖術の多くは、特別なムハッソの使用に基づくものとされており、誰かの病気や死、さまざまな問題が「ムハッソのもの（wa, cha, ga muhaso）」だと言うことは、それらが妖術のせいだと述べることとまったく同義である。妖術使いとは人に危害を与えうるこうしたさまざまの特別なムハッソとその使用法についての知識をもつ者である。人々のなかには、しばしばこうした知識を、西洋の科学技術に対応するアフリカの科学技術（teknoloji ya chiAfrica）だと喩えてみせる者もいる。西洋の科学技術が「発展（maenderero）」のためのものであるのに、アフリ

カの科学技術は人々を破滅させ、発展を妨げるためのものばかりだと卑下する。しかし西洋の科学技術と同様、驚くべきさまざまな結果を生み出すことができるというのである。比較的簡単に手に入るムハッソもあるが、強力な妖術使いにつきものの特殊なムハッソの知識は簡単には手に入らない。それらは秘密の知識であると考えられており、手に入るとしても他の妖術使いから、高い代価を払うことによってやっと手に入るだろう。より強力なムハッソはしばしばはるばるタンザニアやモザンビークまで行って手に入れてこねばならない。そんなわけでムハッソの知識はもっぱら富と力のある老人のものだという通念があるのだが、最近は、おそらくその現金収入のおかげであろうが、若者の妖術使いが増えてきたと人々は嘆く。「そうとも。よく言われているように、あちらの高地（タンザニアのサンバラ山地域）の方では、ムハッソを簡単に買えるのさ。そこでは男たちが今この瞬間にも料理されている（kunajitwa alume kuko ta vivi. ここでは「妖術使いとして訓練される」の意味)。」

「薬」とみなされるもの全体の中でのムハッソの位置について一言触れておこう。調査地域で「薬」一般を指す言葉は、強いて言えばスワヒリ語に由来するダワ（dawa）であろう。ダワには、もちろん診療所や売店で手に入る通常の医薬品も含まれる。ムハッソはこうした医薬品とも、単なる毒（sumu）とも根本的に異なるものと考えられている（註 ダワ)。重要な区別は、医薬品ダワや毒のように、誰が用いようと同様に効果を発揮したりしなかったりする「薬」――これには医薬品のみならず土着の単純な薬草類も含まれる――と、特定の条件下で特定の使い手によって指示された特定の効果を発揮するように、使い手によってコントロール可能な「薬」との間の区別である。ドゥルマの施術師たちが、屋敷の秩序の修復や、憑依霊や妖術による病気の治療に用いる「薬」のほとんどは後者であり、こうした薬は一般にムヒ（muhi）と総称される。ムヒとはドゥルマ語では「木」を意味する言葉であるが、施術の文脈では施術に用いられる、飲んだり、身体に擦り込んだり、燻したり、浴びたり、身に着けたりして効果を発揮する薬一般を指す言葉でもある。実際、それらの「薬」の成分の多くは植物性である。ムヒの使用には、その原材料についての知識、調製の仕方についての知識、そしてそれに効果を発揮させるためのコマンド、つまり唱え言葉（マルミ marumi あるいはマココテリ makokoteri と呼ばれる）についての知識が必須である。

ムハッソは、こうしたムヒの一種であり、同じムヒでも、屋敷の秩序の修復に用いられる薬、および憑依霊による病気の治療に用いられる薬と、はっきりとしたコントラストをなしている。私は以前これを「薬の三角形」と呼んだことがある（浜本 2001:313-314)。

（１）性の序列の乱れや成員に生じた事故、死などで乱れた屋敷の秩序を修復する「冷やしの施術（uganga wa kuphoza)」に用いられる薬は、それに用いられる材料――主としてブッシュから採集された植物性の材料であるが――を生のままで熱を加えずに水の中で揉みつぶした薬液（vuo）の形をとり、その薬液で患者を洗ったり、屋敷に振りまいたりするのが、その施術の中心である。

（２）憑依霊による病気に対する施術（uganga wa nyama）では、それぞれの霊ごとに異なるブッシュの植物を用いる。それは上述の薬液の形で患者を洗うのにも用いられるが、壷に詰め少量の水を加えて火にかけ、立ち上る蒸気を患者に浴びさせる一種のサウナ療法や、材料を煮てその煮汁を患者に飲ませる処方が中心である。火にかけられて調理されるというのが特徴だ。
（３）最後に、ムハッソは、材料を鉄板や土器片の上で完全に炭化するまで炒め、それを細かくすりつぶすことによって得られる黒い粉の薬である。妖術使いが使用するとされる薬はもっぱらこうしたムハッソであり、妖術による病気や災いを治療する妖術の施術師（muganga wa utsai）が治療に用いるのもまたムハッソである。このように３タイプの施術は、薬の材料を「生のまま」使用するか、火にかけていわば「料理する」か、あるいはすっかり炭になってしまうまで「過度に料理する」かで、明確なコントラストをなしていることがわかる（註 三角形）。
ブッシュに由来する物質は、そのままの形で社会秩序の修復・維持に向けての効力をもつ。それは料理することによって、人間の社会秩序の外部の存在である憑依霊との交渉を可能にする。それを過度に、とことん料理した場合、それはどのような効果を発揮する物質に変化するのだろうか。それがもつとてつもないポテンシャルを、人々は妖術使いがムハッソを用いることによって行う、常軌を逸した不思議によって想像しているのだとも言える。

ムハッソの不思議な力
人々がムハッソについてときに面白おかしく、ときに忌まわしげに話していることを聞いていると、ムハッソにはまるで不可能なことは何もないかのようだ。私が最初の調査で住みついた屋敷は、共通の父親が死んだ後も、すでに高齢に達した兄弟たちがその父親の名前を冠する巨大な屋敷のまとまりを維持していたが、屋敷の男たちの多くが屋敷の広場に焚き火を囲んで集まってとる夕食の時間に、彼らが孫や曾孫に対して自分たちの亡父についての思い出を語る場面がしばしばあった。「電気」というあだ名をもった彼らの父は、実は非常に恐れられた妖術使いであったというのだ。ある日、彼の妻たちが夕食のおかずにするものが何もないと彼に不平をこぼした。すると彼は、ちょっと待ってなさいと言うと、トビに姿を変え、遠くの町までひとっ飛びして、他人の屋敷の鶏を捕まえて帰ってきたので、自分たちはその日は鶏スープをいただくことができた。月のない夜、父と二人でブッシュの中を歩いていたとき、父は人差し指に彼のムハッソをつけて、突き出した。それはまるで懐中電灯のように明るい光を放った。あるとき、父は友人たちがヤシ酒を飲んでいるところに出くわした。友人たちが彼に酒を差し出さないことに立腹した父は、何も言わずに立ち去ったが、父が立ち去ったあと、ヤシ酒はまだ採取して２日目だったのに、まるで４日以上たった酒のように、醗酵しすぎてとても飲めない代物に変化してしまっていた。こんな話をしながら、俺たちの親父はいたずら者だったと大笑いするのである。
私の現在の調査地域の主要氏族の一つは、現在の屋敷の長たちの祖父を創始者とするリニ

ージ分枝の人々であるが、その長たちは彼らの祖父カタンボ（仮名）について、その職業が奴隷狩りであったと明かしてくれた。彼は自分の姿を見えなくするムハッソを持っていたので、女たちが水場で水汲みをしているところに忍び寄って、簡単に彼女らを拉致することができた。あるときカウマ人の土地へ行って（註 カウマ）、一人の女性を拉致してきたのだが、カタンボは彼女を売る代わりに自分の妻にした。それが俺たちの祖母なのだと、話し手は明かした。カタンボのムハッソは、話し手の父親ムトゥンド（仮名）に相続されたらしい。ムトゥンドはそのムハッソを自分の飼っている家畜の群れを守るのに用いていたという。ブッシュに群れを放置しておいても、それは誰の目にも見えないので盗まれる心配はない。またこのムハッソのおかげで、群れは置いておいた場所から動くことができないので、いなくなってしまう心配もなかった。ムトゥンドの息子たちは皆そのムハッソを継承することを恐れて拒んだので、その知識はもはや失われてしまった。

１０年ほど前に死んだゴーヨ氏について、その死の様は多くの人々の話の種になっていた。彼も妖術使いで、ムハッソによって不死になっていた。肉体が死んでしまったのに、彼は生き続け、ついに身体が腐敗して蛆がわいているのに、まだ口をきくことができた。彼は息子を呼んで、こんな状態で生きていても仕方ないので、殺してほしい。だが、自分はムハッソで生きているのでムハッソでないと死なせることができない。小屋の屋根に上り、屋根材を一部はがしてその穴から私の胸に瓢箪の中身を垂らしてほしい。息子は、父の願いを最初は拒んだが、ついに拒みきれず言われたとおりにした。そのとたんN氏は息を引き取った。このように肉体がとっくに死んでいるのに生き続けた人の話は、このゴーヨ氏以外にも聞いたことがある。

私の隣人の一人でもあった故キティ（仮名）氏も、豹に変身できることで有名だった。別の隣人カリンボ（仮名）氏から聞いた話だが、カリンボ氏がキティ氏の家を訪ねた帰り道、ブッシュのなかで獣のうなり声がした。見ると木の陰から豹が自分を襲おうと身構えていた。一瞬恐怖を感じたが、すぐに気を取り直し、豹に向かってキティさんだろう、と問いかけると、豹はキティ氏の姿に戻り笑いながら、「なるほどお前は本物の男だ。もし私だと見破れなかったら、お前を食べてしまうところだった」と言った。正体を暴かれると、変身はとけるというのである。キティ氏は実はカリンボ氏の「力を測っていた」のだとカリンボ氏は述べた。私の調査地から 20 キロほど離れたM地域で聞いた話だが、以前その地域で家畜がなにか野生の動物に襲われる事件が相次ぎ、人々を困らせていた。ある晩、夜中に怪しい物音で目が覚め弓と矢を持って小屋の外に忍び出ると、ヤギが獣に襲われ食われているところだった。弓で射ると命中したようで獣は逃走した。翌日、近所に住むニャマウィ（仮名）氏が死体で見つかった。彼の口の周りは、生肉を貪り食ったあとのように血まみれであったという。おそらく獣に変身して家畜を襲っていたのは彼だったのだ。

ある女性は「ムハッソにはいろんなことができるんだ（muhaso una mambo manji）」と言って、自分の夫の父親（分類上）カゾンゴ氏（仮名）に驚かされた経験を語った。彼女がキナンゴ――ドゥルマの中心の町で当時の私の小屋のあった辺りから歩いて１時間くらいの

場所に位置していた――に行こうと、ちょうど私の小屋から見える街道脇のムナゴの木のあたりを歩いていたとき、反対側からやってきたカゾンゴ氏に会い、挨拶を交わしてすれ違った。彼女はキナンゴに、カゾンゴは逆方向に歩き去った。一本道である。しかし彼女がキナンゴに着くと、驚いたことにカゾンゴ氏が向こうからやってくるではないか。瞬間移動としか考えられない。「私は言ったよ。私は術をかけられて惑わされている（nidzitirirwa kare mino)。そしてすごく不安になった。」

話し手にとって――ときに聞き手にとっても――身近な人物についてのこうした話をどう受け取ったらよいのか、私は途方にくれてしまうが、無数のこの手の話が、おおいにありえそうな話として流通している。そこではムハッソが可能にする常識を超えた不思議のもつ魅惑が、ときに、妖術使いに対して人々が常々示すおぞましさの感情を凌駕しているかのように見えることすらある（註 魅惑)。こうした不思議を引き起こす技術をもし使いこなせるとすれば、それは確かに魅力的ではないだろうか。

しかし、その魅力は多くのドゥルマの人々に、そうしたムハッソの獲得を求めさせたりはしないようである。こうしたムハッソの多くについては、施術においても用いられているありふれたムハッソは別として、誰もそれらがどこでどのようにして手に入れることができるのか知らない。実際にそうした特別なムハッソをもっている妖術使いの伝でもあれば手に入るかもしれないが、それは今の日本の社会で誰かが「殺し屋」とコンタクトしてみようと試みるのと同じくらい、非現実的で実現可能性の低い話である。さらにムハッソはそれを所持すること自体に危険が伴うと考えられているふしがある。上のカタンボ氏の所持していた、人を透明人間にするムハッソの相続を今の屋敷の長たちが恐れ拒んだように、父親の所持しているムハッソ――たとえ父親が妖術使いの噂がない単なる施術師であった場合ですら――の相続を子どもたちが拒むことはよくある話である。また、すべての場合にそうだと明示的に語られるわけではないが、こうした不思議を可能にするムハッソの使用には大きな代価がともなうという考え方がしばしば見られる。たとえば人を怪力にし、ナイフや銃弾すら受け付けない無敵の身体にするといわれるブンドゥゴ（bundugo）と呼ばれる施術／ムハッソは――これ自体はおぞましい妖術とは必ずしも考えられていないが――それを施された者を貧乏にしてしまうと言われている。彼が手に入れる財は、現金であれ、家畜であれ、衣服であれ、ラジオであれ、すぐに壊れたりぼろぼろになったり死んでしまったりして、まったく手元に残らないというのである。後述するように、もっぱら他者に危害を加える側面が強調されるムハッソや、それを手に入れた人を裕福にする効果のあるムハッソは――こちらは嫌悪すべき妖術の一種であるとみなされている――さらに深刻な代価を要求する。本人自身が自らの身体になんらかの欠損をこうむったり、それよりも恐ろしいことに、彼が一番大事に思う親族の犠牲を引き換えに要求したりするのである。

バンダ老人（仮名）は、若い頃友人と４人（いずれも近在の実在する人物である）で「富を探しに」タンザニアに赴いた経験を語ってくれたことがある。タンザニアに着くとそれぞれ別々の施術師を求めた。バンダ氏が尋ねた施術師は彼の頼みに同意し、お前を裕福に

するのはたやすいことだと言って、彼に施術を施した。その後、明け方になって彼はある木の根元に連れて行かれ、その根のあるあたりを掘るように言われた。しばらく掘ると、太い瘤のようになった根の一部が現れた。さあ、その瘤のところをよく見てごらん。よくよく見ると、それは彼の母親の顔をしていた。施術師が言うには、さあ、その木の根を瘤のところで切断しなさい。そしてそれを死体をくるむ布に包んでもって帰りなさい。そうすればお前はすぐに裕福になるだろう。「ああ、私にはどうしてもできなかった。私は断った。施術師はお前は私のムハッソを無駄にしたと言った。」（もしその根を切っていたらという質問に対して）「知るもんか。旅を終えて、家に帰ったら、お前の母がしかじかの日に亡くなったときかされる。そういうこともありえる。でも私は断った。おかげで、ほら、ごらんのように私にはなんの財産もない。」母親を殺してムハッソによって裕福になること、それは彼が妖術使いになってしまうことに他ならない。同行した他の友人たちとは、その後、自分たちが何をしたかについて何も語り合わなかったという。しかし少なくともバンダ氏自身は、ムハッソをつかって母親の死と引き換えに裕福になれるという誘惑に打ち勝った、というのである（註 誘惑）。
ムハッソは常識を超えた不思議をなしうる魅惑のテクノロジーとして、人々を強く引きつける側面を持っている。しかしまっとうな人間であれば、そのテクノロジーを手に入れるために他人を犠牲にするという誘惑には抗するべきである。妖術使いとは私利私欲のために、この誘惑に屈服してしまった人間なのである。

ムハッソの作り方・使い方――ムバレを例に
具体的にはムハッソはどのようなもので、どんなふうに使われるのか、実例をひとつ紹介しておこう。もちろん、自分を妖術使いと認めて、その知識を明かす者など存在しないので（註 自称）、ここで例として挙げるムハッソは、妖術使いに対処することを使命とする施術師が用いるムハッソである。私が親しくしているこの施術師は、ときおり近隣の人々のあいだで妖術使いの疑いが口にされることがないわけでもないとはいえ、本人は人々の病気を治すことこそ自分の使命だと熱心に語っていた。妖術使いに対抗する彼の所持する多くのムハッソについて自信を持っており、またいつも真剣に治療に従事していた。また新しいムハッソを手に入れることにも熱心で、自分の持っている知識について秘密主義的なところの多い施術師たちのなかにあって、その知識についてあけすけに語ることでかなり例外的な人物であるかもしれない。2002 年に彼はギリアマ地域のある施術師から、ギリアマの伝統的なムハッソ、かつてはカヤの長老たちのみによって管理されていたというムバレ（mbare）と呼ばれる抗妖術のムハッソを手に入れたばかりであった。そしてその作り方について熱心に教えてくれた。
ムバレの主成分は 7 種類の植物（ムヒ muhi）であるが、いずれも単にブッシュへ行って採集してくればよいというものではない。たとえば主成分の一つであるムサヴラ（musavula）という木について言えば、その採集には込み入った手続きが必要である（註 木の名称）。

昼間に、赤い（褐色の）雄鶏をつれて、その木の生えているところに行き、その根元を掘る。根が３０センチほどの長さまで露出すると、次のように唱える。
「さて、お前に血を与えよう。ムバレよ。今、こうして私はお前を求めにやってきた。汝ムバレよ。汝、ブッシュにいる者よ。今、こうして私はお前を連れにやってきた。これからは屋敷にあれ、汝ムバレよ。汝はキラボ（chirapho）だ。今、こうして私がお前を連れにやってきた。私はお前を盗んでいない。誰某氏から購入したのである。その誰某氏は....（中略。以下購入履歴が述べられていく。）....さて、今私がやってきた。これがお前の血だ。」（註 購入履歴）そして用意していた赤い雄鶏を屠り、その血を露出した根の部分にふりかけ、根を切断する。「そうすると根の切断面から、赤い血のような樹液が滲み出てくるのが見えるだろう。」こうして切り取った木の根は、そのまま屋敷に持ち帰ってよい。この唱えごとに見えるように、ムヒの採集とは、ブッシュの野生の力を屋敷の人間的秩序の中にうまく移行させるための技術になっている。
もう一つの重要な成分であるムエンダ・クジム（mwenda kuzimu 直訳すると「死者の国へ行く者」）という名の木の採集には、より込み入った別の手続きが必要である。ムサヴラと異なり、この木の根を掘るのは夕暮れ時である。黒い布と、性別不明のヒヨコを持ってその木の生えているところへ行き、木の根を掘り、唱えごとをしたのち、必要な長さを切り出す。しかしそのまま持ち帰ってはならない。ヒヨコを屠り、掘り出された根とヒヨコの死骸を用意した黒い布で包んで、木の根元に置き、いったん手ぶらで屋敷に戻る。そして夜明け前の雄鶏が最初に刻を告げるころ、再びそれを取りに行くのである。それを誰にも見られてはならない。こっそり屋敷を出ると、途中で衣服を脱ぎ捨て全裸になる。木の根元に置いておいた黒い布に包まれた木の根を、赤ん坊を負ぶうように背中に背負い、裸のまま屋敷に戻ってくる。ここでは施術師はまるで妖術使いのように、夜明け前の闇のなか全裸でことを成し遂げる。その行為は、屋敷からブッシュへという死者の埋葬のプロセスを、逆回しに演じているかのようである。
他の木についても、同様にそれぞれの採集方法が定まっている。こうして集めた木は細かく砕き、他の成分をそれに加える。他の成分として必要なものは、ジャコウネコの糞、犬の糞、ネコの糞、ロバの糞、豚の糞。ジャコウネコの糞はブッシュで見つけることができるが、ロバの糞はこの地域では誰もロバを飼っていないので手に入れるのが難しい。モンバサにでかけて購入する。あとは、屋敷の四つの方位から採ってきた一つまみずつの土。これらを混ぜ合わせて、土器片の上に置き、火にかけてじっくり焦がすのである。それを磨り潰して細かい黒い粉にすればムバレの完成である。さらに使用に当たって、剃刀の刃と針を用意しておく必要がある。
このようにして作ったムバレは妖術の攻撃を受けている人を治療し、さらなる妖術使いの攻撃から犠牲者を守るのに用いられる。その際には赤い雄鶏を屠りつつ、ムハッソに対して唱えごとをする。その一部を示そう。
「ムバレ、汝ムサヴラのムバレ、汝キテマのムバレ、汝ムエンダ・クジムのムバレ...（中

略、すべての成分に呼びかけた後に、それぞれが盗まれたものではなく、ちゃんと代金を支払うことによってしかじかの施術師から購入したこと等、その購入履歴がつぶさに語られる。）...汝ムバレよ。もしこの患者、この者がまさしく妖術をかけられているというのなら、私は汝クリマムトゥ、妖術使いたちに耕される者に告げる。汝の餌食は妖術使いだと。何者かがここに来たり、この者に妖術をかけようとするならば、汝、彼とあいまみえよ。私は頭痛を命じる、悪寒を命じる、出血を命じる。身体の前（性器）からも後ろ（肛門）からも出血。なぜなら彼は妖術使い。汝は彼の頭を割り、血を噴出させよ。それこそが汝の仕事。彼を食らえ。私は腹についても命じる。剃刀よ、お前の仕事は切り裂くこと。肝臓を切り裂いて落とせ。肺を切り裂いて落とせ。心臓を切り裂いて落とせ。腎臓を切り裂いて落とせ。また私はお前に命じる。その者の前も後ろも封じ、排便も排尿もとめてしまえ。汝、針よ、私は命じる。お前の仕事、それは突き刺すこと。...（後略）...」
強力な施術師だけがコントロールすることができるこの由緒正しいムハッソは、もっぱら妖術使いに対抗する目的で用いられるのであるが、この唱えごとの内容からも明らかなように、それ自体、人を殺す力をもった恐ろしいムハッソであることがわかる。施術師はいわば正義の目的で、このムハッソに命じてその恐ろしい力を発揮させるのであるが、この治療を受けている患者――妖術の犠牲者――は、この唱えごとを聞き、施術師によってムハッソに命令が与えられているのを見て、妖術使いがけっして誰にも知られないようにひそかにどんな行為をおこなっているのかを、おそらく理解するのではないだろうか。妖術使いも、きっとこんなふうにして彼らのムハッソに攻撃を命じているのだろうと。妖術使いがどうやって妖術をかけているのか、誰もそれを見たことのある者はいない。しかし妖術による病気を治療し、妖術に対抗する施術師たちが演じてみせる観察可能な行動こそが、妖術使いが行っているはずの観察不可能な行動の現実的なイメージを提供してしまっているのである。このことの意味は、また後に詳しく論じることにしたい。

ムハッソを用いた妖術

はじめに

ほとんどすべての妖術は、ムハッソの使用によるものである。後に紹介する例のように、人々の説明がその術の別の特徴の方にもっぱら強調点を置いている場合ですら、ムハッソの使用は当然のこととして含意されている。例外はあるが、それについては、別に述べたい。ムハッソを用いた妖術の種類は多く、いちいち数えることもできないくらいである。しかし、対処せねば死にいたるような病気や災いを引き起こす妖術――ということはなんらかの対処法があることも意味していることになるが――のあるものについては、どんなムハッソがあってそれによってどんなことが引き起こされるのかに関して人々は比較的具体的な知識をもっている。ここではそのなかでももっともポピュラーなもの、妖術についての人々の語りに頻出し、また治療の機会も多いいくつかのものに限って紹介することにしたい。

キブリの妖術

キブリ（chivuri）とは、水面や鏡に映った人の姿であり、影（chivurivuri）とも語彙的に関連している。しかし同時に人格の重要な構成要素であるともされており、この点では日本語の「魂」に近い。キブリは夜、身体を離れることがあるが、夢とはこの分離したキブリがもつ経験なのだと言われたりする。死後、祖霊になるのがこの身体から切り離されたキブリなのだという説に、多くの人々が同意する（浜本 1992a）。キブリはしばしば憑依霊に拉致されたり、妖術によって奪われてしまったりすることがある。キブリを奪われた人は、身体に不調を覚えるようになる。施術師はしばしば患者の瞳を覗き込んで、そのキブリが奪われたかどうか確認するという（註 瞳）。憑依霊の場合は、そのキブリを気に入って自分の棲家に連れ去っただけなので、人は朝晩の悪寒、頭痛などの比較的軽度の、しかし長引く身体の不調に苦しむことになる。その人のキブリがどこに連れ去られたのかを探し出し、それを取り返して病人に戻してやらねばならないが、それは憑依霊の施術師の仕事である。しかし妖術によって奪われた場合は、症状は重く、死の危険があり、緊急に対処する必要がある。これがキブリの妖術（utsai wa chivuri あるいは単に chivuri, vivuri(pl.）とも呼ばれる）である。

実はキブリの妖術は、その強烈な特長（後述）によって人々が妖術について考える際の典型の地位を今なお保ってはいるが、今日キブリの妖術によるものと診断され治療がなされる実際例はあまり多くない。ドゥルマで調査を始めてすでに 30 年近くが過ぎているが、キブリの妖術の治療は、調査のごく初期のまだ私自身何もわかっていなかった頃に一度偶然目撃する機会があっただけである（註 キブリ治療）。かつてはキブリのムハッソをもっているとされる恐ろしい妖術使いだと噂される人物が各地にいたし、またそれを治療できる高名な施術師たちも多くいたが、今では少ないと人々は言う。残念ながら、私の知り合いの施術師のなかにはいない。

Mw 老人：昔の老人たちの罪といえば、人のキブリを奪ってばかりいたってことだろうね。あのベキバンバ（仮名）さんといったら！

Ka：いや、ほんとその通り。まさに男そのものだったね（akala ni alume enye. 「男」は妖術使いの意味）

Ha：え？誰の話？

Ka：ああ、昔の妖術使いの名前を挙げているのさ。私の祖父（分類上）のカタナ、あのムァクパタの息子カタナも（妖術で）殺された。大昔の妖術だ。

Mw：人のキブリを奪って、別のところに連れて行く。妖術使いの中には、お前を苦しめることが目的で、すぐにはお前を殺さない奴もいた。そこで施術師を連れてきてキブリを取り戻してもらおうということになる。（妖術使いの方では）それを聞いて、もう大急ぎ。家に帰ってキブリを切り殺す。さて施術師がやってくると、患者はもう死んでいる。切り

殺されている。患者は死んだ、さて何ができよう。巨大な瓢箪を持っているあいつらの仕業さ。あいつらの仕業。

Ka: 当時の奴らは実に獰猛だった。

Mw: このあたりではベキバンバだね。それと最近亡くなったムァザメ(仮名)。それから、ムハッソのムベガ（仮名)、こいつはムァザメより上手だった。それからベムァンガラ（仮名）あのバンダさんの父親だよ。それからベツジ（仮名）とベコンダ父さん（仮名)。それにムハッソのカタナ（仮名）！ムドエ（仮名）さんの息子だったカタナだよ。ムハッソのムベガの弟（分類上）だよ。それからあのンジリ（仮名）の連中。ベキジツォ（仮名）と、あいつンジリ。彼らは最強のムハッソをもっていたものさ。でも最近はキブリの妖術はあまり耳にしなくなった。少なくなった。当時の妖術使いたちはもう皆死んでしまったからな。

近隣だけで、これだけ妖術使いがいては、大変である。

キブリの妖術にも何種類かがある。チャリカ、シュング、ピンダ・モンゴ、ムコモ、バンデ（charika, shungu, pinda mongo, mukomo, bande）などはいずれもキブリの妖術の一種で、症状の特徴や使用するムハッソの種類による区別のようだが、一般の人々はその違いについてはよくわかっていない。いずれも嘔吐、激しい頭痛や関節痛などを特徴とするようである。たとえばシュングについては、頭が「石で殴られたように」痛い、鼻から血を流す、目が飛び出る（膨れ上がる）といった症状があるという。キブリの妖術にかかった人は、夜毎（夢の中で）海に連れて行かれ水のなかに沈められたり、死体を見たりするという。死体を墓まで運ぶ輿（jeneza）が夢に出てくると（註 ジェネザ)、いよいよおしまいだという。「何人もの白い布を身にまとった人々が輿を運んでやってくる。そしてお前の小屋の入り口の前に止まってお前に言う。『さあ、ミツル(実名)よ、この中に入りなさい』。お前は輿に押し込まれる。ぎゅー。それで終わりだ。お前はもう死んでいる。」

キブリの妖術のムハッソは、人の頭部を模った栓で蓋をされた、ひときわ大型の瓢箪の中に入っている。妖術使いはその瓢箪を使って次のような仕方で犠牲者のキブリを罠にかける（ku-hega)。たとえばブッシュの中を一人で歩いているとき、どこからか自分の名前を呼ぶ声が聞こえる。そこで声のした方向に向かって応答してしまう。「ヨォー！」誰もいない。気のせいだったのか。しかし実は呼びかけに応えた瞬間、すでに彼のキブリは妖術使いの瓢箪の中に呼び込まれ捕らえられてしまったのである。夕方を待つまでもなく彼は激しい頭痛に苦しみ始める。妖術使いは捕らえたキブリをしばらくは瓢箪の中に閉じ込めたまま、いたぶるかもしれない。そして時が来れば、それに止めを刺す。犠牲者には死が訪れる。手遅れにならないうちに早急に対処せねばならない。

キブリの妖術の忌まわしい点は、この瓢箪がその持ち主の近親者、とりわけ実の母、姉妹などの女性親族を殺害することなしには完成しないとされている点である。妖術使いは彼

女らを殺害し、そのキブリをこの瓢箪に閉じ込める。そのキブリを用いて、妖術使いは彼の術の犠牲者のキブリを瓢箪に呼び込むのである。キブリはキブリによってしか呼び込むことができない。もちろん殺害するといっても、それも妖術によってである。彼女らは突然の病気などによって不慮の死をとげる。誰もそれが彼のせいであるとは知らない。そして彼は、殺した女性のキブリを使って、彼の瓢箪を完成させるのである。あるいはすでにキブリの瓢箪を持っている妖術使いに殺人を依頼してもよい。その妖術使いは、自分の瓢箪を使って依頼者の女性親族のキブリを呼び寄せ、殺害する。そうしてそのキブリを使って依頼者のために瓢箪を作ってやる。

犠牲者の病気がキブリの妖術によるものと占いによって診断された場合、キブリ戻しの施術が早急に必要になる。それを行うのはキブリの施術師（muganga wa chivuri）と呼ばれる施術師である。興味深いことに――ある意味で実に理屈に適っているのだが――キブリを取り戻すためには、妖術使いと同様なキブリ捕獲のテクニックを用いるしかないとされている。施術師も「キブリの瓢箪」を用いて、奪われたキブリを取り返すのである。単に同じムハッソを用いるというだけではない。そのためには施術師は彼自身の近親者を殺害する必要があると考えられているのである（註 キブリ殺害）。以下の施術の場面の記述からも明らかなように、施術師自身そのことをあからさまに、芝居がかったやりかたで、認めている。

施術はこんなふうに進む。夜中に、犠牲者の屋敷の関係者だけで行われる。患者は小屋の中で､床の地面の上に足を戸口に向けて､布を全身に被せられて仰向けに寝かされている。戸口の外、小屋の前庭の中ほどに人の頭部を模った栓をしたキブリの瓢箪（ndonga ya chivuri）が置かれ、そこから患者まで、トウモロコシの薄皮粉（wiswa）――トウモロコシを粉にする前に搗き臼で搗くが、その際に分離した薄皮の部分で鶏のえさなどにされる部分――で線が描かれる。犠牲者のキブリをこの薄皮粉で捕まえる（ku-hega）のだと説明される。施術師によっては他に、トウモロコシの粉や、水で描いた線を用いる者もいるらしい。また弓矢やナイフなどをキブリの捕獲に用いる施術師もいるそうだ。また話に聞いたところでは、瓢箪から患者の右足の小指までを細い紐で結ぶ施術師もいるそうだ。キブリが戻ると、この紐を伝ってキブリが患者に入っていくのが見えたという。振動が伝わっていくのが見えるらしい。なかなかに凝った演出である。私が見た唯一の事例では、トウモロコシの薄皮粉の線が描かれただけだった。施術師は小屋の中で患者に薬液（vuo）を振りまくと、小屋の外に出る。屋敷の人々は手拍子を打ち、一人の若者が石油缶をリズミカルに打ち鳴らし、施術師はそれに合わせて歌い踊り、ときおり瓢箪の中を覗き込むしぐさをする。録音機材を持ち合わせておらず、歌や人々とのやりとり、唱えごとの具体的な内容は不明であるが、別の機会に聞いたところによると施術師は「私は母を食べた。どうぞ私をお笑いください。神のキブリよ。ch'arya mayo, nitsekani, chivurigbwa cha mulungu.」と歌っているのだそうだ。と、突然施術師の目から涙があふれ出る。瓢箪の中に彼が殺した親族の姿が見えたから、その生前を思い出して悲しくなって泣くのだという。それは病

人のキブリを取り戻した瞬間でもある。施術師の死んだ親族のキブリが、奪われた病人のキブリを連れ戻しに行って、それと一緒に帰ってきたということなのである。小屋の中では患者が仰向けに横たわったまま、身体を小刻みに震わせ始める。キブリは必ず右足の小指から帰ってくるので、患者をよく観察していれば、右足の小指がまず震え始め、そして脚、全身と震えが伝わっていくのがわかるという。施術師は屋敷の主に、用意してあったヤギを屠り、その血を椀にとってもってくるよう急き立てる。椀の中の血は患者の身体に塗りつけられた（より普通には患者に飲ませるのだという）。最後にキブリの瓢箪のムハッソとその他のムヒで作られた護符（pingu）が患者に与えられ、足首に巻きつけられた。患者のキブリが再び奪われることの予防だという（註 治療結果）。
ムハッソの入った瓢箪を用いて、犠牲者のキブリをその中に捕獲して殺す。その瓢箪は、妖術使い自身の近親者を殺してつくったものである。こうした強烈で忌まわしいイメージが、人々にキブリの妖術をドゥルマの妖術の典型として考えさせているのだろう。さらにこの例は、ムハッソを使用する者の根源的同質性についてもあざやかに語っている。施術師がもっている治療用の瓢箪は、妖術使いが用いるものと同じものであるし、施術師はそれを親族を殺害せねば手に入れられない。施術師自身が一種の妖術使いなのである。キブリの妖術使いが、実際に瓢箪を使ってキブリを捕獲しているところを目撃されることはけっしてない。しかし目撃不可能な妖術使いの行動を、施術師たちがまさに目に見える形で――ただし人々に危害を加えるのではなく、人々を助ける目的で――演じて見せている。ここでも施術師のほうが、妖術の現実的なイメージを提供しているのである。

フサの妖術

キブリの妖術とそれに対抗する施術は、施術師と妖術使いの紛れもない同質性を明るみに出している。他の妖術においては、この同質性はそれほど劇的に演出されてはいない。一方、ムハッソの性格そのもののなかに、邪悪さと有用性、不当性と正当性の点で曖昧性が含まれているような例はけっこう多い。その一つを紹介しよう。
ツァムラ（tsamula）と呼ばれる妖術があるが、「散らばらせる、離散させる」などの意味を持つ動詞ク・ツァムラ（ku-tsamula）に由来するこの名前は、もっぱら邪悪な攻撃を連想させる。それは平和な屋敷の人々を仲違いさせ、屋敷の人々を離散させてしまう妖術である。屋敷の解体と親族の仲違いと離散という事態は、ドゥルマの人々にとっては、ある意味で個々人の生死以上に深刻で恐ろしいことかもしれない。占いで、屋敷の問題がツァムラのせいであるというとされることもかなり頻繁に見られる。ツァムラは妖術使いの隣人の理不尽な、しかも取るに足らない妬みに端を発しているかもしれない。
「こんな具合だ。私がお前のことを憎んでいるとしよう。こんなふうにお前が食べている様子を見るだけで、してやられた気がする（viniverere kare）。あるいはお前が収入を得るのを見るたびに。別にお前と喧嘩している（実際に激しく言い争ったりしている）というわけではない。昨日も喧嘩したわけじゃない、一昨日も喧嘩したわけじゃない。でもお

前が日々ちゃんと食事をしている様子を見て、そんなふうに食事していることを妬ましく思う（natamani viratu vyako uryavyo）。ミツル（実名）の野郎、こいつは俺を惨めな気分にさせる（unanyeta uwe）。よし待ってろよ。ムハッソを手に入れてやろう。そしてこのあたりに仕掛けてやろう。私は夜やってくる。ムハッソの包みをそこにくくりつけ、開いておく。風が吹けば、ムハッソが飛散する（undafuka fuka）。（風上に仕掛けるのですか？）そう、風がこう吹いて、熱気がこちらに来るように。」こんな具合に妖術使いは、なんの恨みもない相手に対して、単なる理不尽な嫉妬からツァムラを仕掛ける。その効果はてき面である。「お前自身が（妻と）仲違いを始めてしまう。（お前はこう考える）妻がここにいるなら、俺は出て行こう。ナイロビに行ってしまおう。こんなところではもう暮らせない。さてこんな具合に屋敷の誰も彼もが不機嫌で怒りっぽくなる。屋敷の仲間に敬意を払わない。長老もなければ、子供もない。誰もが自分こそが男だと思っている。こうして皆、散り散りばらばらになる（atsamukana tsamukana kamare）。これがツァムラだ。」

この説明だとこの妖術をかけるのはずいぶん簡単そうだが、別の人の説明によればもう少し込み入った手続きと準備が必要である。ツァムラをかけようとする妖術使いは、夜、逆毛の鶏（kuku wa chidimu）をもって犠牲者の屋敷に忍び寄り、屋敷近くの地中にそれを生き埋めにする。そして翌朝、屋敷の人に気づかれぬようそれを掘り出す。もうこれだけで十分実行困難な話なのだが、さらに掘り出した鶏が死んでいてはならないという条件がつく。掘り出した鶏がまだ生きていることがわかれば、次の段階に進む。トウモロコシの練粥の食事を摂った際の最後の一塊と、履きつぶされた草履の片一方を用意する。掘りだされた鶏を屠り、その足を切り取る。ムハッソに唱えごとをし空中に散布するとともに、用意してある練粥の最後の一塊、磨り減った草履の片一方、それに切り取った鶏の足を、屋敷の人々が散り散りばらばらに去っていくべきそれぞれの方向に投げ捨てる。ツァムラはただちにその効果をあらわし、早くもその日のうちに屋敷の人々が言い争いを始めるのを見ることができる。人々が離散し、屋敷が消滅してしまうまでにそう長くはかからないだろうという。

取るに足らない些細な妬みから隣人の幸福を破壊してしまう忌まわしい妖術使い、というイメージがこれほど前面にでている妖術もないといってよい。しかもそうしたからといって、別に妖術使い自身には何の得もないのに、と人々は吐き棄てるように言う。それどころか、このツァムラに使用されるムハッソは、その所有者を貧乏にすると考えられている。「今日 2,000 シリング手に入れても、もう明日にはなくなっているという具合」だという。もしその結果、裕福な隣人をいっそう妬むことになるとすれば、もうまるで妬みの負のスパイラルだ。

ところでツァムラに用いられるムハッソにはもう一つの使い方があり、そちらの方はフサの妖術（fusa）として知られている。煙などが飛散する、霧散するという意味の動詞ク・フカ（ku-fuka）に由来する名称である。係争中の問題などを解決に至らないままうやむやにしてしまったり、追及する気を失わせたり、忘却させたりして問題を立ち消えにする術

であるという。たとえば、人を雇って仕事（小屋の建築とか）をさせながら、いざ約束の金を支払う段になって、金を踏み倒すためにフサを使う。支払いを催促しても、なにかと口実を作って支払わない。ついに業を煮やした男が、よし明日（キナンゴの町の）首長の法廷に訴えようと決心する。しかし翌日いざ出かけようとするときに、別の厄介な問題に見舞われて、結局町に行くことができない。こんな具合でらちがあかず、ついには本人自身がすっかり忘れてしまう。これがフサの効果なのだという。明らかにフサをかけられた方にとっては、とんでもない邪悪な術である。
しかし、フサに関してはそれを専門とする施術師がおり、そのムハッソを所持していることを隠すどころかむしろ誇示し、近隣の人々の役に大いに立っているという事実がある。フサは、地域の人々にとって大きな有用性ももっている。裁判などで不利な立場に立たされた者にとっては、裁判での彼に対する追及がうやむやになるのは願ってもないことだ。そしてこの地方の多くの人々にとっては、町の雇用者や行政や警察相手の裁判では、不利な立場に立つことのほうが圧倒的に多いのである。というわけでこの術の需要はけっこう大きい。近隣の一人の女性メンザゼ（仮名）には、モンバサの商店で店番をしていた孫息子（彼女の死んだ娘の息子）がいたが、彼が店の金をくすねて逃走したとの容疑で逮捕された際に、ためらうことなく近所に住むフサの施術師を雇った。裁判が開かれる前夜に彼女の屋敷にやってきた施術師は、夜を徹してムハッソの入った小さな瓢箪を自分の左手の掌に打ちつけながら唱えごとを唱え続けたという。裁判当日の夕方まで彼は休みなく唱え続けたという。結局、孫息子には一年の禁固刑が言い渡されたので、この徹夜の努力も無駄に終わったのであるが（註 フサ）。
ツァムラとして用いられるとき、このムハッソの使用は正当化の余地のない邪悪な妖術である。フサとして用いられるとき、それをやられた方にとってはやはりけしからぬ妖術なのだが、彼とて立場が変わればたちまちそのお世話になることになる。万人に開かれた困難打開の可能な手段の一つであり、隣人に対して使うことにはいささか問題があるとしても、それが町の雇い主や警察、政府の役人に対してということになれば、完全に正当化可能な行為となる。ある種のムハッソは、このように使用のコンテクストに応じてその色合いを変えるのである。

フュラモヨ
上で紹介したフサにもややその傾向がないわけではないが(註 ツァムラ)、妖術の中には、病気や不慮の事故や災難などの形で相手に危害を加えるだけではなく、犠牲者の思考や精神に変調をもたらし、そこから犠牲者の生活の破綻、最終的には死を引き起こすといったタイプの妖術がある。
ドゥワ（duwa）と呼ばれる妖術は、キブリの妖術と同様に、どちらかといえばかつて猛威を振るったが、最近は以前ほど盛んには見られなくなった部類の妖術である。一言でいえば貧窮の末の死をもたらす妖術である。「お前が困窮するようにと祈願する（ku-apiza）す

る妖術だ。お金を手に入れても、まったく残らない。ヤギを手に入れても残らない。お前自身が売り払ってしまう。そして元の木阿弥。これがドゥワだ。」ドゥワにはウリャニ（uryani)、フカラ（fukara)、ドゥワ・ラ・キジツォ（duwa ra chidzitso 意味は「嫉妬のドゥワ」)、ドゥワ・ラ・モホ（duwa ra moho 意味は「火のドゥワ」）などいくつかの種類がある。ウリャニとフカラについてはたいていの人が知っているが、あとの二つについてはやや施術師たちの専門知識に近いもののようだ。ウリャニでは、我われふうの言い方をすると精神的に破綻する効果が強調される。それに囚われると、心が平静を失い（roho kutanga tanga)、まだ生きているのにまるでもう自分が死んでいるような気がする（akale mo dza atsikale mo)、人々に嫌われているような気がする、また自分が自分ではないような気がする（dza ni mutu dza tsi mutu 「人であるようで人でない」の意味)、他の人々から遠くはなれてしまったような気がする、他人とうまく折り合いがつかない、といった状態におちいるのだと言う。それに対してフカラでは、生活が乱れ経済的に破綻する効果に強調が置かれる。金が手に入ると屋敷には寄りつかなくなり、すべて酒に消えてしまう、何か職についても、長続きせずすぐに止めてしまう、などはいずれもフカラの術のせいでありうる。もちろん同じドゥワなので、区別はそれほど明確ではなく、思考や精神の変調はいずれにも共通しているようにも見える。「フカラ！お金が手に入ると、分別（akili）を失う。落ち着かない。何か役に立つことに使いたい。でも使い道は多い。お金を使い果たしてしまって、分別が帰ってくる。(それまでは) 人の忠告にも耳を貸さない。奥さんが、どうして無駄使いするのなどと言おうものなら大喧嘩。仲裁もできない。お金が底をついて、喧嘩も終了。分別がやってくる。」(註 フカラ）妖術にかかってなくても、普通に見られそうな状況ではあるが。

年配者たちの中には、ドゥワが個人に対してではなく親族集団に対してかけられる妖術であると強調する人々も多い。父系リニージ（ウクルメ ukulume）ではなく母系リニージ（ウクーチェ ukuche）がターゲットであると言う人もいれば、屋敷全体が治療の対象になると言う人もいる。その治療は、ブッシュの中の開けたところに柵をめぐらして「牛囲い(chaa)」をつくりそこに人々全員を座らせて行う。囲いの中にはムコネ・ウチェ（mukone uche）だけで焚き火が六ヶ所に作られ（註 ムコネ)、それに火熾し棒で火をつける。鶏（逆毛、白、黒）による施術の後、人々の周りをヒツジが引き回され、その胃の中身が取り出され、それで人々の全身が洗われるのだという。この最後の手続きは、屋敷の修復のための「冷やしの施術」を思い起こさせる（浜本 2001：233-234)。年配者以外は、この施術が実際に行われたケースをほとんど知らないようである（註 ドゥワ)。

今日では下火になったといわれるドゥワに対して、実際の占いでの診断や、施術においてドゥワにとってかわっているのがフュラモヨ（fyulamoyo）と呼ばれる一群の妖術である。その名称自身はドゥルマ語の「心（moyo)」を「曲げる、そらす（ku-fyula)」に由来している。こちらもドゥワと同様な思考や精神の変調を引き起こす効果を特徴としているが、フュラモヨはもっぱら個人をターゲットにした妖術である。

「フュラモヨに捕らえられるとどうなるかって？心(心臓)が速くなる(roho yindakpwenda mairo.)。心が破裂する（roho kpwenda kpwahuka.)。そして不安（na wasiwasi)。分別がかき乱される（akili kuvurungika)。そして仲間のことを嫌いになる（kukala kpwenzi anzio)。どこに行っても泣きたいばかり。そしてロープで首を吊ることばかり考える（kuziazira kudzifunga lugbwe)。自分を殺すこと（ku-dzolaga）ばかり考える。それが終わりだ。」

全身の痒み（kuwawa wawa）を症状にあげる人もいる。「自分の体を掻きむしってばかりいる。そして発狂（kpwayuka)」。

対人関係、とりわけ夫婦関係のの破綻もその特徴に挙げられる。「フュラモヨに打たれると、おまえ自身が（結婚生活に）うんざりしてしまう（rakukala hata uwe usinywe)。(そして次のように考える。）もう出て行こう。私の夫は貧乏だし（kana chitu.「物をもっていない」)。」「誰と付き合うようになっても、ああ、この人じゃない（ye ndiye mugbwira, aa, tsiye.)。お前の方から別れてしまう。」「どこかに行ってしまいたい。自分がいる場所はここじゃない。」

子供の学業不良もフュラモヨのせいかもしれない。「キンドロ（仮名）は父に学校に行かせてもらった。父の金を壊した（使った)。そして後は（最終学年の全国一斉におこなわれる）試験を受けるのを待つばかり。ところがフュラモヨを入れられた。突然勉強が嫌いになる。心は不安でいっぱい。分別はばらばらになり、自己嫌悪。うんざり。友人も皆嫌いになってしまった。先生ですら、先生を見るとまるで糞便でも見ているかのよう。先生たちとも仲違い。さあ、どう思うね？フュラモヨだってことに異論ある？」

職業放棄や一箇所に腰をすえることができないのもフュラモヨによるものかもしれない。「お前は、良い職にありつく。そして理由なしにそれを捨ててしまう。何故だと聞かれてもお前は何も言わない。ああ、ああ、ただうんざりしているだけ（udzisinywa tu)。(妖術使いは）お前が順調にやっているのを嫉妬する。それでお前の心を捻じ曲げてしまうのさ（yunafyusa fyusa moyo tu)。一緒に仕事をしている同僚がこいつだとする（その場に居合わせた青年を指差して)。お前はこいつが嫌いになる。こいつと意見があわない。上司とも仲違いする。これこそフュラモヨだ。」

生活も無計画になる。「お金が手に入っても、何に使ってしまったのかわからない。金が手に入ると、この金はきちんと置いておこうと思うものだろう？なにか難事に直面するかもしれない。たとえ１００シリング、２００シリング（の難事）だったとしても、(お金をちゃんと置いてあれば）お前には心配ないとわかっている。でも、もしお金を手に入れて、それが無軌道になくなってしまう（zinasira hovyo hovyo）としたら？それは、お前、ムハッソだよ（註 ムハッソ)。」

「症状（magbwiri 「捕らえ方」)」は、このようにさまざまであるが、いずれも「心を曲げる」つまり精神を変調させるということでは共通性があるとも言える。当初私は、自己嫌悪や自殺を妖術のせいだとする考え方に違和感を覚えた。しかし多くの人がする次のよう

な説明を聞いているうちに、妙に納得してしまった。
「お前にとって一番大切なものはなんだい？お前自身じゃないのかい？だからお前はお前自身を嫌いになることなどできない。(それなのに) 自分自身を憎み、殺してしまおうと考える。ムハッソだ。もしムハッソでなければ、たぶん憑依霊（註 自己嫌悪)。もし何もなかったら、なんと、お前は知性（akili「分別」）がない。人々はそれを問題にすることを止めてしまう（garichwe, kagagombwa kahiri.)」普通ならまともな知性があれば人は自分を嫌いになったりするわけがない。だからもし人が自分を嫌いになったとしたら、そのこと自体普通ではない、なにかあるというのである。
フュラモヨにはさまざまな種類があると言われている。その細かい点は施術師たちの専門的な知識の領分――しかもそれぞれの施術師ごとに分け方や種類の数も違っているようだ――であるが、次のような二つの種類わけは、かなり広く知られている。
第一の種類わけでは、フュラモヨは「霊のフュラモヨ（fyulamoyo ra pepo)」、「自己嫌悪のフュラモヨ（fyulamoyo ra dzimene)」あるいは単に「自己嫌悪（dzimene)」、「憎悪（chimene)」、「ムバユムバユ（mbayumbayu)」などに、おそらくはその主要症状に基づいて呼び分けられている。「霊のフュラモヨ」に捕らえられると、夫や仲間に暴言を吐くなど他人との折り合いが悪くなり、何もかもが嫌になり、ナイフで自害したり、入水したりして自殺する。「自己嫌悪のフュラモヨ」の場合、言葉どおり人は自分自身を憎み、ブッシュの中で首を吊るなどして自殺する。「憎悪」に捕らえられると、友人のことを嫌いになり、独りで居たがるようになる。「ムバユムバユ」は、人を狂わせる。紙や葉を引きちぎっては独りで笑ったりする。狂人（vitswa）そのものである。いずれも最後には犠牲者は自殺する。
もう一つの分け方は、第一の種類わけよりは一般的ではないが、フュラモヨをさまざまな動物の名前で分けている。「ワニのフュラモヨ（fyulamoyo ra mgbwena)」の場合、犠牲者は入水し、ワニに食われて死ぬ。「イヌとネコのフュラモヨ（fyulamoyo ra paka na diya)」の場合、犠牲者は会えばいつも喧嘩ばかりする。「サイのフュラモヨ（fyulamoyo ra pera)」では、犠牲者はいつも怒ってばかりいる。「ゾウのフュラモヨ」では、犠牲者は同じく怒りっぽく、他人と仲良くできない。「ライオンのフュラモヨ（fyulamoyo ra tsimba)」にかかると、人は棍棒で他人に襲い掛かったり、乱暴を働く。「バッファローのフュラモヨ（fyulamoyo ra nyahi)」もまた人を怒りっぽく攻撃的にする。「ハイエナのフュラモヨ（fyulamoyo ra fisi)」の場合、犠牲者は人を見ると逃げるようになる。「ウシのフュラモヨ（fyulamoyo ra ng'ombe)」の場合、人は無口で不機嫌になる。「コウモリのフュラモヨ（fyulamoyo ra nundu)」にかかると、人を見ると逃げてブッシュに身を潜め、首を吊って木からぶらさがる。「ヤモリのフュラモヨ（fyulamoyo ra mwafu)」に捕らえられると、夜眠れなくなり、夜通し目を覚ましている。
いずれのフュラモヨもンザイコ（nzaiko）という同じムハッソによってかけられる（註 ンザイコ)。上の種類分けに見られる症状等の違いは、妖術使いがムハッソに対して、犠牲者をどのように死なせるよう命令（ku-lagiza）したかによる違いだという。前節のフサのム

ハッソとは違って、人々の役に立ちそうな使い方はなさそうであるし、そうした話は聞いたことがない。フュラモヨのムハッソは踏み道、とりわけ道の分かれ目に仕掛けられる。妖術使いは、犠牲者がどのような死に方をするかに関係する物――首吊りで死んでほしければ縄の切れ端を、といった具合に――といっしょにムハッソを地面に埋める。誰某を捕らえるようにと命じて。これが「罠（muhambo)」であり、それによって犠牲者を「罠にかける（ku-hega)」のである。その上をターゲットが歩くと、ムハッソは犠牲者を捕らえる（ku-gbwira)。フュラモヨがこのような仕方で用いられることは、歌にまで歌われているので知らない者はいないくらいである。
「フュラモヨっていうのは、ムハッソそのものだよ、あんた。『フュラモヨは、屋敷では拾われない。道端で拾われる』って聞いたことない？」
「歌にもこんなふうに歌われている。『フュラモヨを、お父さん、私は道端で拾ってしまった。(fyulamoyo, baba, naritsola njirani)』」
「ムハッソだよ。ンザイコだよ。」
「屋敷では拾われない、とは？」
「『屋敷では拾われない、道端で拾われる』。つまり道端に罠をかけられる（rihegbwa）ってこと。」
「人がこんなふうに言っているのを聞いたことないかい？『あれ、お前結婚したのかい？』『結婚なんかするもんか。彼女はフュラモヨ。途中で拾っただけの女さ。』ってね（笑い)。」
フュラモヨは今日、この地域では最もポピュラーな妖術の一つであり、私が立ち会ったことのある妖術関係の施術の半数以上がフュラモヨに対する治療の施術であったことがそれをよく物語っている。その施術については、のちに詳しく述べることにしたい。

テーゴ

誤解があってはならないので急いで付け加えておきたいが、フュラモヨは私の調査期間を通じて最も頻繁にその診断や治療に遭遇することができた妖術の一つではあったが、ムハッソを用いる妖術の中では、この種のいわば精神に変調をもたらす効果をもつ妖術より、身体に直接危害を加える妖術の方がその数においては圧倒的に多いことは言うまでもない。特定の身体部位や症状に特化した、いくつもの妖術が知られている。たとえばマハナ（mahana）は重い皮膚疾患と結びついた妖術の一つで、我われがいうところの「ハンセン病」は――食事を通じて広がり、また屋敷内で繰り返すという観念がある一方で――マハナによって引き起こされるとされている（浜本 2001:349)。またニョンゴー（nyongoo）は、妊娠中の女性をターゲットにし、さまざまな疾患や死を引き起こすとされており（浜本 1992b)、妊娠中の女性はなにかにつけてニョンゴーを治療できる施術師のお世話になることになる。ここではそれらのうちからテーゴ（tego）について紹介する。
テーゴは性器を中心とする症状をもたらす妖術で、そのもっとも典型的な症状は性器から

の膿や出血と痛み、とりわけ排尿痛である。それが淋病であることを知っており、かつそれが性行為を通じてかかることを知っていて、なおかつそれを妖術によるものだと主張することが可能である。妖術使いは、はしばしば性交によって人を捕らえるようにテーゴの罠をかけると知られているからである。
テーゴには特徴的な症状に応じて、多くの種類がある。性器の痛み、膿や出血という最もよく知られた症状は、「トゲのテーゴ（tego ya mwiya）」あるいは「ハリネズミのトゲ（針）のテーゴ（tego ya mwiya wa nungu）」によるものである。そのほかに、灼熱感と痛みの「火のテーゴ（tego ya moho）」、切り裂かれるような痛みの「剃刀のテーゴ（tego ya wembe）」、刺すような痛みの「針のテーゴ（tego ya sindano）」、女性器からの突然の出血を特徴とする「ムコモのテーゴ（tego ya mukomo）」、全身の痺れを特徴とする「ガンジのテーゴ（tego ya ganzi）」、疱疹ができてそれが破れる「爛れのテーゴ（tego ya mahurungbwe）」、皮膚の潰瘍を引き起こす「カンジョンジョのテーゴ（tego ya kanjonjo）」気が狂いそうな痒みを引き起こす「ムァンバニャマのテーゴ（tego ya mwambanyama）」などがある（註 ムァンバニャマ）。
「軍隊アリのテーゴ（tego ya tsalafu）」「シロアリのテーゴ（tego ya lutswa）」「オオトカゲのテーゴ（tego ya goromwe）」「ゴキブリのテーゴ（tego ya kombamwiko）」「サソリのテーゴ（tego ya chizimba）」「ヘビのテーゴ（tego ya nyoka）」「カメレオンのテーゴ（tego ya lumbwi）」「イヌのテーゴ（tego ya diya）」など、動物の名で呼ばれるテーゴも多いが、それぞれの動物にちなんだ症状を特徴とする。たとえば「軍隊アリのテーゴ」は全身を蟻にたかられ這いまわれるような感じから、「カメレオンのテーゴ」は皮膚の変色がともなうことから、それぞれそう呼ばれている。必ずしも、身体症状とはいえないものもあり、「イヌのテーゴ」は性交途中で性器の分離が不可能になるといった事態を引き起こすとされている。
このように実に多くの種類があるが、ここに挙げたものに尽きるわけではない。異なる施術師ごとに、それぞれがさらに多くの種類を挙げられることができるだろう。しかし使われるムハッソは一つであり、フュラモヨと同様こうした種類の違いは、妖術使いがムハッソに対してどのように命令したかの違いである。妖術使いは妖術をかける際に、さまざまな補助物をいわば媒体として同時に用いるとされている。術に際して必要なこうした品々はキリャンゴーナ（chiryangona）と呼ばれる。テーゴの場合、赤い鶏（kuku wa kundu）が常に必要で、さらにどうした症状を引き起こしたいかに応じて、たとえば「トゲのテーゴ」であれば、ハリネズミの針とともに術がかけられる。
テーゴのムハッソには、妖術使いが他人に危害を加えるために用いる以外に、人々にとって正当とみなしうる用い方がある点が特徴である。それはフサのところで紹介した有用性ともまた異なっている。それは妻の浮気を防ぐために、夫によって仕掛けられることがある。妻の小屋の戸口に仕掛けられるのだが、この事実を知らずに――妻本人も知らないのが普通なのだが――その女性と性関係をもつと、テーゴに捕らえられてしまう。とりわけ

「イヌのテーゴ」の場合、妻と浮気相手はまさに浮気の現場を押さえられてしまうことになる。こうした場合、夫の嫉妬深さは嘲笑の対象になりうるかもしれないが、彼がテーゴを仕掛けたこと自体は非難の対象とは考えられていない。妻を「盗んだ」者の方に非があるのである。
テーゴ以外にもいくつかのムハッソには、この種の正当とみなしうる使用法がある。

キラボ――ムハッソの正当な使用
キラボの種類
ムハッソが上のテーゴの正当利用に見られるような用い方をされる場合、それはキラボ（chirapho)と呼ばれる。スワヒリ語の対応する言葉キアポ(kiapo)には通常「宣誓(oath)」の訳語があてられているが、今問題にしているムハッソの用い方としてはあまり適切な訳語ではない。キラボという言葉は、一見したところ関連が薄い３つの行為をカバーしている。一つは、テーゴの使用もその一例であるが、財産等の盗難を防ぐ目的でムハッソを仕掛ける行為、もう一つは、なんらかの損害に対して犯人がわからない場合、あるいは加害者側からちゃんとした賠償が得られない場合に財産の返却や賠償を求めてかける呪詛の行為、第三が係争――とりわけ妖術告発の裁判など――において両当事者の言い分が食い違っているときに、最終的にどちらの主張が真実であるかを決定するためのムハッソを用いての試罪施術である。「宣誓」という言葉がかろうじて当てはまるのはこの第三の場合に限られる。キラボと呼ばれるこの三種の行為のあいだにどのようなつながりがあるのだろうか。

盗難防止等のキラボ
妻の浮気防止に用いられる（妻が他の男に「盗まれる」のを防ぐために用いられる）テーゴのように、キラボとしての利用が可能なムハッソは多い。盗難されたくない物に対して、そうしたムハッソを仕掛けておき、「もし何者かがやってきてこの木のマンゴーの実を食べたなら、キラボよ彼を捕らえよ」などと唱えるのである。ムハッソの作り方の一例として先に紹介したムバレもそうで、紹介した際にあげた唱えごとは、ムバレを妖術の攻撃に抗するキラボとして用いる際の唱えごとであった。「何者かがここに来たり、この者に妖術をかけようとするならば、汝、彼とあいまみえよ。...汝は彼の頭を割り、血を噴出させよ。それこそが汝の仕事。彼を食らえ。」唱えごとはムバレにこのように命じていた。ハンセン病に関係のあるマハナもキラボとして利用されうる。
この第一のタイプのキラボとしての使用に特化したムハッソもいくつも知られている。マンゴーやココヤシ――それほど一般的ではないがパパイヤ、トウモロコシやキャッサバ――の所有者が盗難を防ぐためにキラボを仕掛けることは、一般的な慣行である。最も有名なキラボは「バハシ（bahasi)」と呼ばれるもので、これが仕掛けられていることは一目でわかる。オーカーの赤い斑点を施されたアフリカマイマイの殻をのせた棒が、地面の上に

突き刺さっていれば、それがバハシである。これが仕掛けられた果実や作物を盗んで食べると、盗人はバハシに捕らえられる。その症状は、鼻や口、目などからの出血であり、なかなか止まらない。あるいは怪我をした際にも、傷口から血が止まらない。このキラボを専門とする施術師は、通常の施術師をさすムガンガ（muganga）という名称では呼ばれず、特別にボラ（bora）と呼ばれる（註 ボラ）。
「ヒヒのキラボ（chirapho cha nyani）」も作物の盗難よけによく使われている。ヒヒは畑のトウモロコシを盗むことで知られている、というのがその名前の由来である。このキラボに捕らえられると、ヒヒのような声で泣き喚き、落ち着き泣くきょろきょろあたりを見回すなどヒヒのように振舞うようになる。「ヒヒのキラボ」という言葉自体、人々が大勢いるところで口に出すことが禁じられている。この言葉を口にしたとき、居合わせた人々の中に万一このキラボに捕らえられている人が混じっていたら、その人はその場で死んでしまうだろうと言われている。ヒヒのキラボには子供がよくひっかかることが知られている。
その他に、「陸ガメのキラボ（chirapho cha kobe）」「ワニのキラボ（chirapho cha mamba）」「海ガメ（ndogoe）」「テング貝（sekeneko）」「ザヤ（dzaya）」などが手軽でよく知られているキラボである。いずれも皮膚疾患が特有の症状である。「トウモロコシ粒のキラボ（chirapho cha pure）」に捕らえられると、トウモロコシ粒を食べたヤギのように腹が膨満する。
こうしたキラボに捕らえられていることがわかると、そのキラボを専門とする施術師によって解除（ku-taphula）の治療を受ける必要がある。キラボは、それが誰であれ、作物を食する人を無条件にとらえるので、キラボを仕掛ける際には作物の所有者は、施術師からキラボの効力を解除するための方法を授かっておく必要がある。それはムハッソであったり、特定の草々で作られるヴァンダ（vanda）と呼ばれる草束である。所有者やその家族などが作物を利用する場合には、前もってキラボを「冷やし（ku-reza）」し、その効力を無効にしておかねばならない。さもないとたとえ所有者であっても、キラボに捕らえられてしまう。実に面倒だ。

償いを促すキラボ
第二のタイプのキラボは、盗難その他の被害に際し、加害者の正体が通常は不明の場合にかけるキラボで、その目的は加害者の方から名乗り出て、盗んだ品を返す、あるいは被害を賠償するよう促すことにある。加害者と思しき者が賠償に応じようとしないときにも用いられることもある。このタイプのキラボを専門とする施術師がおり、人々は多くの場合、遠方にいる施術師に依頼してこの種のキラボを打つ。
たとえば、ウシを盗まれた者はキラボの施術師を訪問し、ムハッソに対して「誰が私のウシを盗んだのか私は知らない。それが男なのか女なのか私は知らない。しかしキラボよ、行ってそいつを捕らえよ。」などと呪詛の言葉を述べる。この行為をクロザ（ku-roza）するという。キラボは悪事を働いた当人ではなく、彼が属する母系集団（クランそのものと

いうよりはその分枝（「戸口（muyango)」））のメンバーを、彼との関係の遠い者から順にたて続けに殺していくのだという（註 母系)。キラボを打つ者は、キラボを打つ際に、相手の集団のメンバーが全員死んでしまうと誰も賠償を払う者がいなくなってしまうというので、メンバーのうち一人が死ぬことのないようにキラボをうつことがあるという。この手続きを「棒を折る（ku-vunza chigongo)」という。
この種のキラボにも多くの種類がある。なかでも「バナナのキラボ（chirapho cha izu)」と「キリト（chilito)」はその進行の速さと、効き目の強力さで恐れられている。バナナのキラボでは、施術師は依頼者に死んでほしい人数分だけのついたモンキー・バナナ（izu ra chisukari）の房を用意するよう言い、それに対して唱えごとを行わせる。たとえばウシを盗まれた者の場合「もしそれが自分からいなくなったのなら、それまで。しかしもし人がそれを盗んだのなら、その一族（母系）全員、残さず死んでしまえ。」などと唱える。バナナの房を小屋の梁につるしておく。バナナが熟して、一本落ちるごとに一人死ぬ。一方キリトのキラボは、ドゥルマ固有のものではなく、カンバ人のキラボであり、その施術師もカンバ人であるが、同様にその効果の苛烈さで知られている。人の頭蓋骨にムハッソを詰めたものがキリトで、それを打ちつつ下手人の母系集団全員の死を唱える。キリトは妊娠中の女性から殺していくというので、とりわけ恐ろしがられている。
連続する死に気づき、不審に思った誰かが占いに行って、そこではじめてキラボのせいであることが判明する。メンバーが集まり、身に覚えのある者に名乗りださせ、キラボを打ったと思われる人のところに謝罪と賠償交渉に行き、キラボを解除してもらわねば、集団内で連続する死は止まらないとされている。キラボの死には特徴があり、耳や鼻から血を流すといった症状をあげる者もいるが、実際のケースではこれは必ずしも当てはまっていない。しかし同じような死に方が一つの母系集団内で続くときには、キラボが疑われるので早急に占いに赴きその原因を突き止めようとすることになる。上述の「バナナのキラボ」の場合などほとんど時間の余裕がない。一人が死に、その埋葬がまだ終わらないうちにもう一人が死んだという知らせが入ってくる。人々は不審に思い占いを打ち、このキラボが打たれたことがわかる。「集まった人々はお互いに尋ねあう。そして問題が露見すると、お金を出し合って（キラボを打った）人のところに駆けつける。というわけでバナナのキラボで死んだ人には服喪（hanga）は開かれない。」
2003 年、近隣のムベガ（仮名、前出のムハッソのムベガの孫）の一族にキリトが打たれているという噂があった。全員死に絶えようとしているのに、何の手も打とうとしていないと。ムベガの甥（姉妹の息子）ニャレ（仮名）はトラックの運転手だった。いつものようにトラックに乗って出発しようとしたのだが、なんと荷台に二人の子供が乗り込んで、そのまま眠り込んでしまっていた。知らずにトラックを走らせたのだが、目覚めた子供たちはびっくりして高速で走っているトラックから飛び降りた。一人はその場で死に、もう一人も病院に運ばれそこで死んだという。ニャレは責任を問われず、二人の子供に対する死の賠償（kore）も支払われなかった。そこで二人の子供の父親がキリトを打ったというの

だ。彼はカンバ人であった。
「そいつが言ったことには、『なるほど。でもトラックを運転していたのは人じゃないかい？もし車がひとりでに走って子供たちを殺したというのなら、車は死ぬことはないだろう。でもそれを人が運転していたというのなら、そいつは自分の一族を滅ぼすだろう。』ああ！ニャレの姉妹から始まった。女性親族からまず死んでいくのさ。ああ、あいつら皆死んでしまうよ。なのにあいつらはキリトを解いてもらおうとしていない。（たぶん知らないのでは？）知らないなんてことがあるもんか。カンバ人がそう言ったのは皆聞いていた。私もその場にいた。」
幸い母系女性親族のたて続けの死は二人で打ち止めになり、2008 年の時点では、この噂も立ち消えになっていた。
キラボを解いてもらうことによって、一族の全滅が免れたとされるケースもある。調査地域の、カタンボ（仮名）一族に何十年か前に起きた出来事だという。カタンボ（仮名、前出のカタンボとは同名の別人）は警官で、税金未納で逮捕された男をロープで縛って連行していた。しかしその男は逃げ出し、雨季で増水していたキラジニ川を渡ろうとして溺死してしまった。遺体は親族によって４日後に発見された。そこでキラボが打たれたのだという。
「『あいつが自分で死んでしまったのなら、それでよし。しかし彼が殺されたのなら、あんなふうにロープで縛られていたせいで死んだというのなら、ムァゴロ（ムァゴロは母系氏族の名称）のあの一族、彼らが滅んでしまうように。』キラボはまずメンジラ（仮名）という女性を殺した。ついでベメリ（仮名）さんの奥さん、カウィラ（仮名）さんを殺した。カウィラさんの服喪がまさに開かれているときに、当地のムァンダンダ（仮名）さんの妻ウェチャカ（仮名）が死んだ。カウィラの姉だよ。牛乳を攪拌（バターを取るために瓢箪に入れて振る）している最中に倒れて、その場で死んだ。そこでキラボではと人々は思い当たった。占いに行って、溺死した男の親族にキラボを打たれたとわかった。もう何人も死に絶えてしまった。悲しいことだ。しかし生き残った者が集まり、そこに男が呼ばれた。男がやってきて言うには『よくぞお招きくださった。というのは後９日で、あなた方のベンデグゥ（仮名）も死ぬところだったのです。ベムリベ（仮名）さんについては棒を折ってあったのですが。』賠償を支払う人間を生き残らせるために棒を折っておくのさ。」
死の賠償（kore）が支払われキラボは解除されたという。私の目には死んだ男の自業自得とも思えるのだが、キラボが下した判断は違っていたらしい。責任のない者から死んでいくというのは、とんでもないとばっちりのようだが、まさにキラボが恐ろしいのはその点にある。
キラボが打たれるという可能性だけでも、賠償を促す効果がある。2003 年、エッガ（女性）の兄が近隣の人々から妖術使いの嫌疑をかけられ、最終的に試罪施術によって妖術使いであることが確定した。この結果を聞いた近隣の人々は、彼の屋敷を収穫されたトウモロコシもろとも焼き払った。さらに彼らは彼を探し出し鉈で殺害しようとしたが、彼は遁走し

行方知れずとなった。困ったのは彼の母系親族たちで、彼の妖術で殺された者の親族が支払われるべき死の賠償（kore）を求めて自分たちにキラボを打つ可能性がある。そこで残された母系親族で金を出し合って共同で賠償を支払うことになった。エッガの成人した息子たちにはそれぞれヤギ一頭の割り当てがなされ、相手の親族に対する賠償の支払いが開始された。

キラボは日常生活のごくありふれた可能性として登場する。メンザゼ（前出）は、モンバサで働いている孫息子が店の金を盗み姿をくらましたらしいという一報を受けたとき、「あの子は私たちツォンゴ（母系集団の名前）を滅ぼそうとしているよ」とぼやいていた。ときどき私のところに来て、孫たちについての不満をしゃべっていくのが常だったので――彼女は夫と死別した後、彼女の死んだ娘の子供たちを引き取って、彼女の兄弟たちが住む屋敷にスペースを与えられて暮らしていた――これも彼女の例のぼやきだったのかもしれないが（註 インド人）。

私の近所のカタンボ（先の二人とはさらに別の）氏の畑のキャッサバが夜のうちに何者かに盗まれたとき、氏は怒りくるって周囲にキラボを打ちに行くと吹聴した。すぐさま同じく近所のジョン（仮名）が盗んだキャッサバをもって犯人は自分だと名乗り出た。どうかキラボは打たないでほしいと。ジョンはこの手の窃盗では、ほとんど近隣ではユージュアル・サスペクトであったが、その後しばらく笑い話の種となっていた。キラボを打つためにはけっこうな出費がいる。ジョンはまさかキャッサバごときでキラボが打たれるとは思っていなかったのだろう。この話では、またジョンかという点とジョンの慌てふためきぶりが人々の笑いを誘うのだが、普通は人はキラボを打ちにいく場合、そのことを周囲に吹聴してまわったりしない。むしろ人に知られないように行うものなのである。キラボが打たれたという事実は、つねにそれが引き起こした結果によってのみ知られることになる。

ヤシ酒売りのバカリ（仮名）は、商売道具の大事にしていた自転車――ヤシ酒の産地からヤシ酒をポリタンクに詰めて運んでくるのに自転車はなくてはならない――を、就寝中に盗まれた。小屋の入り口に止めてあったのだ。バカリは、近所の誰かの仕業としか考えられないと暗い顔をして毎日うろつきまわっていたが、ある日思いつめた様子で私に借金の申し込みにやってきた。遠くのM町まで行ってそこの施術師がもっている強力なキラボを打ちたいというのだ。いくら正当な手段だとは言え、殺人とみなされうるものに私が資金援助したという話が万一広まっては困るので、私は断り、上のジョンの件を思い出したので、近所の者の仕業だとすればキラボを打つという脅しだけで十分ではないかともちかけた。バカリはこの提案には不満そうで、結局それを実行にうつさなかった。彼がどこかから必要な金を入手してキラボを打ちに行ったのかどうかはわからない。その年（2008 年）の調査を終えて帰国する時点では、彼はまだ自転車を取り戻せずにいた。

多くの人によれば、キラボを打つことに危険がないわけではない。たとえばウシが盗まれたと思いこんだのだが、実際には迷子になっていただけだった、自分からいなくなっていたという場合、あるいは物を盗まれたと思ったが、実は自分がどこかに置き忘れただけだ

ったなどという場合、キラボを打ってしまうとどうなるのか。人によって意見は異なり、そのような場合キラボは何もしないという人もいるが、多くの人はキラボはそれを打った側に帰ってくるかもしれないという。自爆の危険があるのである。同じことはキラボに対して、直接ターゲットの名前を挙げないというやり方にも表れている。いかに誰が犯人か確信していても、もしターゲットの名前を指定してキラボを打ち、万一違っていた場合、確実に打った方がキラボに捉えられてしまうだろうという。したがってキラボに唱えごとをする、つまりクロザする流儀に従ったほうが無難である。「私はこれこれの物を盗まれた。それを盗んだのが男なのか女なのか私は知らない。だがキラボよ、もしそれを盗んだ者がいるなら、行ってそいつを捕らえよ。」といったフォーマットで語るのである。
キラボは本当に効くのだろうかという疑問をお持ちの方もおられるかもしれないが、それに対しては、効くわけがないだろうと答えるしかない。バカリがどうしたかはわからないが、損害を受けた個人の怒りが大きい場合、資金が許せばキラボを打とうとするだろう。しかし彼が、その期待される結果を手に入れる可能性は低い。一方、たまたまたて続けの不審な死に見舞われた母系集団は、占いの結果を受けて自分たちの犯したかもしれない罪を数え上げ、キラボを打ったに違いない人物を特定し、賠償と引き換えにその解除を求めに行くだろう。しかしその当の人物が実際にキラボを打っていたかというと、おそらくその可能性はそう大きくない。この二重の不在という構造は妖術についてもそのままあてはまるので、後に詳しく考察することにしたいが、ここでは次の点だけ指摘しておこう。キラボに効果がなくても、人々にとってもそれは驚くには当たらない。相手がキラボが打たれるだろうと考えて、前もって手を打っているかもしれないからだ。妖術使い、つまり強力なムハッソをもっていれば、キラボの攻撃をかわすことくらいは簡単であり、だからこそキラボを打ちにいく者は、そのことを知られてはならないのである。キラボの解除を求められた方はというと、たとえ身に覚えがなくても、自分がキラボを打ったことを認めて喜んで賠償を受け取るだろう（註 自白）。

試罪施術

同じくキラボという言葉で呼ばれる第三の範疇に属するものに、試罪施術がある。これについての詳細は妖術告発との関係で別に扱うので、ここでは簡単な紹介にとどめたい。係争において対立する両者の言い分が食い違い、いずれが真実であるか話し合いでは決められない場合に、白黒つけるために行われるのがこの施術である。さまざまな種類が知られているが、私の調査地域で行われているのは「パパイヤのキラボ（chirapho cha payu)」と「鉈（tsoka)」の二種類のキラボである。「パパイヤのキラボ」は非常に権威あるものとされ、妖術告発において最終的に真偽の決着をつけるのに用いられている。それを行うことのできる施術師は二人いるが、そのうちの一方が圧倒的に有名で、隣接するギリアマ人たちも妖術問題の決着のためはるばる彼の施術を受けにやってくる。その料金も高い。1990年当時は800ケニア・シリングであったが（当時のレートで約4000円)、現在は1500シリ

ングに値上がりしている。他方の「鉈」は、妻の浮気の有無のようなより日常的な問題でも比較的気軽に利用できる。料金も数十シリングですむ。
「鉈」のキラボを受けることを、「鉈の場所に入れられる（ku-tiywa tsokani)」という。両当事者とも薬液（vuo）で手を洗うよう言われ、順番に手のひらを火中で熱せられた鉈で６回切りつけられる。鉈と言っても、農作業などで用いるマチェーテ・タイプのものである。真実を告げている方の者は、この施術で火傷ひとつ負わない。虚偽の主張をしていた者は、手ひどい火傷を負うことになる。
妖術告発であっても、女性同士が行うものはそれほど深刻にはとりあわれない傾向があり――女性は分別が足りないので根拠もなくすぐにかっとして告発をしてしまいがちだと考えられている――「鉈」のキラボへ送られることがある。ある女性は、自分の子供が生まれてすぐ死んでばかりなのは、姑が自分の子供たちに妖術をかけているからだと夫を責めた。夫は自分の母にこの嫌疑を伝えたが、母は否定した。そこで夫は、母と妻の双方を「鉈」のキラボに送った。最初に母が施術を受け、無傷だったのを見て、妻の方はおびえて泣き出した。妻の嫌疑が間違いであることがこうして証明された。
「パパイヤのキラボ」では、まだ熟していないパパイヤの実を４つに切り、その各々にムハッソを塗り、一切れずつそれぞれの当事者に渡され、両当事者はそれを口の中でよく噛み砕くよう言われる。真実を主張していた者は何事もないが、虚偽の主張をしていた者の唇が腫れ上がりひりひり痛む。放置すると死ぬとされているので、唇が腫れた者はあらためて真実を告白してキラボを解除してもらわねばならない。
いずれのキラボについても、当事者の各人がキラボに対しておこなう唱えごとは、同じフォーマットに従う。妖術告発であれば、出来事について詳しく述べた後に「もし私が彼に濡れ衣を着せているだけで、彼は妖術使いではないのなら、キラボよ私を捕らえよ。しかしもし彼が事実私の妻を殺した妖術使いであるなら、キラボよ畑へ行け（＝私には手を出すな)。」と唱える。同様に、告発された側も「もし私がうそをついており、私が事実妖術使いであるなら、キラボよ、私を捕らえよ。だがもし私が濡れ衣を着せられているだけなら、キラボよ畑へ行け。」(註 畑）と唱える。それぞれがキラボに対して、もし自分の主張が真実でないなら自分を捕らえるようにと唱えるのである。

キラボと妖術
いずれもキラボと呼ばれるこの３種類の施術は、一見すると内容的にはあまり共通するものはないように見える。しかしムハッソをどうコントロールするかという観点に立つと、共通の特徴が見えてくる。とりわけ妖術と対比させてみたときに、それははっきりする。たとえば、第一のタイプのキラボと妖術との違いについて考えてみよう。とりわけテーゴのように同じムハッソでこの二つの使い方が区別されている場合、その違いは何か。一方はその正当な使用で、他方は悪事を目的にした使用である、というのが自明な答であるが、それはあまりにも素朴すぎる。この二つの用い方の最大の相違は、ムハッソに対するコマ

ンドのいわば構文の違いである。妖術使いは、特定の個人を攻撃するようにムハッソに命令していると想像されている。つまり「誰某を――あるいは誰某の一族や誰某の屋敷を――捕らえよ」という形で、具体的なターゲットを目的語に指定したコマンドを用いている。それに対して、盗難などを防ぐためのキラボにおいては、コマンドは別の構文に従っている。ターゲットは特定の個人というよりは、特定の行為である。「もし誰かが、しかじかの行為――作物の摂取とか女性との性交とか――を行えば、その者を捕らえよ。」という形で、条件を設定しその条件にあう者をターゲットにするという構文になっている。
同じことは、第二の損害に対する賠償を促す施術としてのキラボについても言える。一応正当な行為とされてはいるものの、容赦なく相手の死を求める点でも、それが罪のない者に降りかかるという点でも、おそろしさにおいて妖術とよい勝負である。ここでも再び妖術との違いは、そのコマンドの文法にある。妖術のように単に「誰某を（あるいは誰某の一族を）捕らえよ」という形で命令するのではなく、たとえば盗難の場合であれば、「もしそれが自然になくなったのではなく、誰かがそれを盗んだのであれば、その者（の一族）をとらえよ」という形で、それは発動される。
試罪施術のキラボにおいても、同じである。ここではターゲットは特定の個人、つまり自分自身であるが、それは明示的な条件分枝をともなう。「もし私の主張が誤りであれば、私を捕らえよ、私が真実を述べているのなら、私を捕らえるな」というわけである。
３つのタイプのキラボにおいては、いずれもムハッソに対するコマンドのなかに、なんらかの条件節が埋め込まれている。それがキラボをまさに特徴付けるものなのである。キラボとは、条件によって処理を分岐するタイプのコマンドによってムハッソをコントロールする施術だといえる。そしてこのような構文によるコマンドを受け付けるムハッソが、単に妖術にだけでなく、キラボにも使用できるテーゴのようなムハッソだということになる。

ムハッソの想像力
ムハッソの想像力
すでに述べたように、しかるべきムハッソを使えば妖術使いにできないことなど何もないかのようである。瞬間移動、透明になること、動物への変身、銃弾や刃に対する防御能力。この地方で携帯電話が大ブレークする直前、人々は妖術使いの「モバイル」について面白そうに語っていた。それはアフリカマイマイ（大型カタツムリの一種）の殻なのだが、妖術使いたちはそれを使ってどこにいても互いに連絡を取り合うことができるのだというのだ。誰が言い出したのやら、よくも考えつくものである。さらには、誰某さんの小屋の後を通ったとき、中から「ハロ、ハロ」といってなにやらしゃべっている声がする。来客がいるのかと思って、戸口に回って声をかけると中の声はやみ、誰某さん以外誰もいない。ベッドの脇にはアフリカマイマイの殻が置いてあった、などという噂話までもっともらしく聞かされた。ムハッソの概念は、人々の想像力を文字通り炸裂させる。まるでもう何でもありであるかのように見える。

『秩序の方法』（浜本 2001）において、ドゥルマの人々にとっての生活の場である屋敷の秩序とその維持・修復の営みについて検討した際に、ムハッソが解き放つこうした想像を、「秩序の経験を構成する、当たり前の出来事の結びつきの『外』についての想像」（浜本 2001:313）として位置づけた。
屋敷の秩序についてのドゥルマの語り口の中では「人々の豊穣性は屋敷の中にいることによって守られ保証されている。」屋敷の秩序は、さまざまなもの――新生児、新たに混入してきた妻、収穫物、購入した家畜等々――を、屋敷の構成員の序列に従った性行為――「産む」と呼ばれる――を通じて屋敷の内部にきちんと「置」き、その順序だった秩序を夫婦の不断の性関係の秩序だった反復によって維持することによって保証されている。

「不適切な相手とは交わらず、禁じられている期間には性関係を慎み、しかるべき時機にしかるべき相手と適切なやり方で性関係をもち、小屋や衣服や寝具やその他の事物のある種の関係の人々との共有を注意深く避け、またさまざまな活動の開始においてある特定の関係の人々に先んじたり、先んじられたりしないように気を配る等々の細々とした「ドゥルマのやり方（chiduruma)」に慎重に従うことが、その条件である。これらの一つでも疎かにすると、人々の健康や豊穣性は危険にさらされてしまう。屋敷の中で暮らすということは、こうした制約を生きる、つまり「ドゥルマのやり方」のなかで生きるということであるが、こうした制約はしばしば実に簡単に破られてしまいうるので、逆にこれらの制約こそが屋敷内で起こりうる災いの主要な源泉なのではないかという逆説が生じてしまう。もちろん一連の語り口の中では「外」は明らかな危険であり、屋敷のなかで守られていることがその危険に対する唯一の対処である。しかし屋敷のなかにいることの方も、同様に災いのもとでありうるとするならば、別の仕方で「外」の危険に対処できるならば、いっそ「外」に置いたほうがより安全であるとは言えないだろうか。」（浜本 2001:302）

屋敷の人々の誤った性関係の害をとりわけ被りやすい新生児や家畜を守るための施術――「外に出すこと」と呼ばれる――は、まさにこうした可能性を試みたものであり、それらを屋敷の中に「産ん」で、その秩序にくみこむ通常の手順をスキップして、ムハッソによって代替的な保護を与えようよいうものである。ムハッソで、屋敷の秩序による保護を代替してしまいうるというわけである。
ムハッソが掻き立てる想像、その魅惑や誘引、それらの現実性の一部は、おそらく当たり前の日常の秩序の中にとどまることに含まれる高いコストによって支えられているのかもしれない。日常の秩序の中にいることがもたらす恵みと、そこに踏みとどまるためのコストは、そうした秩序を代替し、あるいは乗り越えてしまうムハッソのもつ魅力と、それに対して支払わねばならない代償に、おそらく釣り合っているのだろう。透明化や瞬間移動、動物への変身といった当たり前の秩序にとってはあり得ないことを可能にすると同時に、当たり前の秩序の内部の諸関係の中で働くとされる効果に対して、ムハッソはいちいちそ

のより強力なまがい物を差し出してみせる。それはムハッソを用いたもう一つの妖術である呪詛（bako）のイメージの中にも見て取ることができる。

バコ―妖術的呪詛

妖術使いは相手に対して投げかける言葉によって、相手に死をもたらすことができるとされている。バコ（bako）あるいは「口の妖術（utsai wa mulomo)」と呼ばれるものである。またその行為は「バコを打つ（ku-piga bako)」と呼ばれる。ムハッソの使用にせよ、その他の振る舞いにせよ、妖術使いがその攻撃を行っている場面は観察不可能とされているのに対し、妖術使いが相手に面と向かって投げかける言葉は、その人物が妖術使いに他ならないことを示す圧倒的な証拠として､特定の人物を妖術使いだとほのめかす語りにおいて、顕著な位置を占めている。

かつて地域の有力者の一人であったチャロ（仮名、故人）は妖術使いだとの噂のある人物であった。彼の弟でキナンゴ病院の運転手をしている男がいた。あるときチャロは彼に自分をある場所まで乗せていってくれるよう頼んだが、別の地域に行く仕事があるとのことで断られた。二人は口論になり、チャロは彼に対し「お前が本物の男なら、私はお前がお前の車に乗ってここに戻ってくるのを楽しみにしているよ。(Nakulorera chikala u mulume jerijeri uuye phapha na gariyo.)」と捨て台詞を吐いた。弟が運転していた車は大型のトラックと衝突し、彼は死亡した。

ここでの「男」という表現は、自分もムハッソを持っていて攻撃に対する供えができている者の意味だと、人々は解釈する。妖術による攻撃はここでは、それぞれがムハッソで武装した拮抗する二人の男の戦いのイメージを喚起する。チャロの捨て台詞は、お前に対抗するだけのムハッソがあるなら無事に生きて戻れるだろうが、さもないとこちらの攻撃によって死ぬことになるだろうという意味をもつことになる。この台詞は妖術使いが相手に投げかける呪詛の定型であり、ここまで妖術の攻撃を明示していると――もし本当にチャロがこの通りの発言をしたとしてだが――彼が妖術使いであることは否定しようがないことになる。

次も典型的な妖術使いによるバコの例として聞かされた話しである。ムァクバ老人(仮名、故人）は目が見えなかった。リコーニ（モンバサ島と南海岸を結ぶ渡船場のある地域）に行くと、座って自分の前に布を敷く。人々がそこに投げてくれる小銭で暮らしを立てていた。そこに彼の甥が来て、その布を足で踏みつけてしまった。「なんで布を踏むんだ。いったい誰だ私の布を踏んだのは。」ムァクバは「お前も私同様に目が見えないとでも言うのかい。見えていながら物を踏むのはわざとだ。私を馬鹿にしているのだ。もしお前が男なら、お前が明日またやってきてこの布を踏むのを楽しみにしているよ。」甥の青年はその夜、息を引き取ったという。たかがこんなことで、というような些細な理由で人を殺すのは、まさに妖術使いの妖術使いたる所以である。

ここまで明示的でない発言も、しばしば呪詛として解釈されうる。ベムツェシ老人（仮名）

の死についての物語は1989年当時、地域のゴシップになっていた。彼はたかが牛乳のことで呪詛を打ったというのだ。彼は毎朝、近所のアリ（仮名）のところで牛乳をもらうのが常だった。しかしその日の朝、アリの牛はほとんど乳を出さず、彼自身の子供に飲ませるための一瓶（700cc）を確保するのがやっとだった。そこでベムツェシに対して「ごめんなさい、一本しかなくて、これをあなたに差し上げるわけにはいきません。私の子供のためのものなので。毎日一本、子供のためにとっておくのです。今日は牛が乳を出さなかったのです。というわけで、ごめんなさい。キルワさんのところでお尋ねになっては？もしかしたら手に入るかもしれません。」するとベムツェシは「わかったよ。牛乳は別のところでもらうことにしよう。でも明日またお前が搾乳して、お前の子供の分にも余分に一本置いておけるように楽しみにしているよ。」と言ったのだという。この話を報告した女性は続けて言った。「なんということだ。彼は恐ろしいことを口にしてしまった。その日のうちじゃないかい。ベムツェシが全身膨れ上がって死んだのは。彼は、こんなつまらないことがもとで死んでしまったのさ。」実は1984年のマジュートによる抗妖術運動（後述）によって、当時この地域は妖術に対して封印されていた。つまり妖術使いが妖術をかけようとすると、当の妖術使いに死がおとずれるとされていたのである。彼の死は妖術使いとしての死として地域で解釈されていた。彼の上の発言は、人々にとっては十分にバコであった（註 バコ）。これらの発言は単なる妖術による攻撃の威嚇ではなく、妖術使いによる場合は発言そのものに相手を死に至らしめる効果があるとされている。なぜなら妖術使いはムハッソを口に含んで、そうした発言をするからだという。

Q: 誰でもそういう言葉を言えばバコを打つことができるのですか。
A: いや、もしお前が（舌の）上にモノをもっていれば、お前にも打てるだろうよ。（Be ungaripiga nikukala una utu u dzulu.）
Q: つまり口に含んでいたと？（Ukale watata tata?）ということは、バコというのは妖術の一種なのですね。
A: 妖術そのものだよ、それは。

妖術使いのなかには、バコを打つたびにいちいち口にムハッソを含まないですむように、自分の体の中に前もってムハッソを仕込んでおく者もいると人々は言う。自分の舌に剃刀で傷をつけ、そこにムハッソを擦り込むことによってムハッソは体のなかに永遠にとどまり、妖術使いが上のような発言をするたびに、それをバコにしてしまうのである（註 生得的）。
ムハッソを所持している可能性がきわめて低い人物の場合、同じことを言っても妖術のバコとは解釈されないことがある。ムズング（仮名）氏の第４夫人であるバラカ（仮名）は結婚して以来、たて続けに３人の子供を生後すぐに失っていた。3 人目の息子が一歳を過ぎたばかりで死亡した際に、埋葬の場でムズング氏の第二夫人とその息子を妖術使いとし

て名指しし、「お前がこれからたくさんの子供（文字通りには５人の子供）を産むのを楽しみにしているよ。」と捨て台詞を投げつけて実家である祖母のもとに帰ってしまうという事件があった。この発言は、妖術使いのバコととられてもおかしくない発言であったが、人々はそれをバラカの幼さと分別のなさのせいにして、それを呪詛とは解釈しなかった。当時まだ１９歳でしかなかった彼女がムハッソを所持しているとは誰も考えなかったからである（浜本 2001:342-344)。

人が発した怒りを込めた言葉が、忌まわしいバコとして解釈されるか、単なる悪罵や行きがかり上の捨て台詞として解釈されるかは、その人が妖術使いである可能性がどの程度疑われるかによって左右される。バラカの場合とは逆に、上で紹介したベムツェシ老人の発言は、我われなら何の悪意もない普通の発言として受け取るかもしれない程度のものであるが、近隣の人々が彼に対していだいていた疑いの中では、紛れもないバコとして解釈できる言葉であった。後述するように、極端な話をすれば近隣の誰が実は妖術使いであると判明しても不思議ではないような社会空間においては、ほとんどあらゆる何気ない言葉が妖術使いのバコと解釈されてしまう余地がある。冗談のつもりで軽く言った言葉が、後にその人が妖術使いであることの紛れもない状況証拠として語られる。妖術使いの存在は、日常のコミュニケーションの空間を多義性と不安に満ちた空間に作り変えてしまうのである。

ムハッソは怒りを含んだ何気ない言葉に、相手を死に至らしめる破壊的な力を与えてしまう。結局、妖術師が打つバコもムハッソがなしうるさまざまな不思議の一つであるように見えるかもしれない。しかし事態はほんの少し込み入っている。なぜならバコという言葉には、妖術とは無関係な親族関係に内在する力の行使を指すという用いられ方があるからである。「ドゥルマ社会の老人――権威と呪詛」（浜本 1995）において詳しく紹介したように、父親や母親が自分の子供の振る舞いに対して腹をたてたり悲しんだりすると、当人たちが子供に危害を加えようという意図がなくとも、子供にはさまざまな災いが降りかかる。これをムフンド（mufundo）――「結び目（fundo)」より――というのだが、この怒りをうっかり言葉に出してぶつけてしまうと、それはバコと呼ばれる。バコの方がムフンドよりも大きな災いを子供にもたらす。子供の身に起こるさまざまな災いが、占いによって、父母のいずれかのムフンドやバコのせいであるとわかると、子供は父母を怒らせた自らの振る舞いを謝罪し、ムフンドやバコを解除してもらわねばならない。ムフンドをもっている、あるいはバコを打ったとされる父あるいは母は、子供に対する自らの不満を洗いざらいぶちまけた上で、もはや心の中に悪い言葉は何もないと宣言して、口に含んだ水を自らの胸に、あるいは相手の胸に、あるいは口の中に――これは事態の深刻さの程度によって異なる――吹きかけるクハツァ（kuhatsa）と呼ばれる手続きによって解除を行う。ムフンドやバコの効果は、父母と子供という親族関係に内在する効果であり、任意の他者に対して発動させることはできない（註 ムフンド)。親子関係に内在するバコと、妖術使いの用いる任意の敵に行使しうるバコとを区別して、前者を「父母のバコ（bako ra abayo na ameyo)」、

後者を「他人の(ドゥルマ人の)バコ(bako ra muduruma)」と呼ぶこともある(浜本 1995:450, 458)。
これは年老いた親（とりわけ父親）が子供に対して打つバコに、ある種の曖昧さを引きこんでしまう。そのバコが関係に内在する「父母のバコ」と看做される限り、それを打った側に正当性があり子供の振る舞いが非難の対象であるが、もしそれがムハッソを用いた妖術としてのバコであると見られるなら、それは邪悪な行為になる。その境界はしばしば限りなく曖昧である。
妖術使いの打つバコとは、本来親子関係のなかでのみ、しかも危害の意図なしに働く効果と同等のものを、ムハッソの力で自由に誰に対しても行使できるようにしたものであることがわかる。ここでもムハッソは、人々が自明視して生きている秩序に内在する効果に対する、はるかに強力な代替物を差し出している。それはあらゆる自明の秩序の中にもぐりこみ、それを侵食し、嘲笑う。秩序そのものを超越することのおぞましさと魅惑で、人々の想像力を掻き立てているのである。

夜の舞踏者――異常性としての妖術

はじめに

1989 年 12 月 13 日パパイヤのキラボである男が妖術使いであることが確定した。翌日知り合いの伝を頼って、遠方の彼の住む地域を訪ねてみた。その男はまだ口から首筋にかけて腫れ上がり、口もきけない有様で小屋の前に敷いた莫蓙の上にぽつねんと足を投げ出して座っていた。周りには誰もいなかった。私の頼みでしぶしぶ私を彼の屋敷まで連れてきた男たちは、形式的に挨拶の声をかけはしたものの、彼に対してあからさまな軽蔑の表情で、こんなところにいても仕方がないと私に立ち去るよう促した。この男は、自分の兄弟の孫息子（したがって彼にとっても孫息子である）を殺害したとされていた。この孫息子は小学校８年生で、11 月中旬の最終全国試験も終え、その結果を待っているところだったという。好成績でパスしていることは間違いなかったと人々は口々に言った。その突然の死である。思わず「いったい何の理由で、孫息子を殺したりしたんだろう？」と尋ねた私に、居合わせた人々は妖術使い（mutsai）に理由（sababu）などあるものかと吐き捨てるように言った。若者たちは、自分たちドゥルマ人は臆病なので妖術使いをのさばらせてしまっている。隣のギリアマ人の地域であれば、キラボで妖術使いだと判明した男を人々は放っておかない。バスを降りたとたんに切り殺されるのだ、自分たちもそうしたほうがいいのだと、興奮したようすで話した。
妖術使いが悪いのは、単に彼らが悪事を働くからというだけではない。普通の人間の道理では推し量れない、理解を絶した振る舞いによって人々の神経を逆なでにするのである。
妖術使いについてのさまざまなイメージのなかで、一般人にはアクセス困難な特殊な知識と技術を駆使する者というイメージが一つの核を作っているとすれば、もう一つの核とな

るのが、正常な人間のあり方から外れた変態ともいうべきイメージである。

食人と妖術使いの結社

妖術使いの振る舞いのおぞましさについて、もっとも詳細に語られ、またもっとも荒唐無稽な話の一つが、妖術使いたちの結社（chama）と彼らによる食人の話である。妖術使いたちは定期的に集まって人肉パーティを開いているというのである。

その合図は特別のラッパ（nzumari）あるいは妖術使いの太鼓（ngoma ya utsai, chigoma cha wanga）である。その太鼓は人間の皮が張ってあるとも言われている。妖術使いはどこにいようとも、たとえナイロビやペンバ島（註 ペンバ）であっても、その音を聞いて駆けつけてくる。もちろん一般の人には聞こえないので、それを聞いたことのある人は誰もいない。

「ある者は丸木舟（空飛ぶ）に乗って、ある者は箕（lungo）――搗いたトウモロコシをふるい分けるための――に乗って、ある者はコウモリに姿を変えて飛来する。箕には４隅に呪符（pingu）が付けてあり、ムハッソをくゆらした煙でいぶす（kufukiza）と飛行機のように空を飛ぶ。」もちろん誰もそれらを実際に見たことはない。

食事に供されるのは、埋葬されたばかりの死体である。「屋敷の方では人々は服喪（hanga）をとり行なっている。彼らは何も知らない。死体は夜、連れてこられる。」妖術使いたちが呼び掛けると、死体は墓場から自ら出てきて妖術使いについてくるのだという。私の調査地からは遠いタンザニアとの国境近くで、次のような話を聞かされたことがある。

ココヤシからヤシ酒を抽出する仕事をするムジェマ――この言葉自体「ヤシ酒抽出人」という意味の言葉なのだが――という男が、ある日いつものようにヤシに上って仕事をしていると、二人の男が裸で歩いてくるのを見た。近所で噂の高い妖術使いたちであった。二人は墓場に着くと、もっていた長い棒を二つに折った。彼らは呪文を唱え、墓の一つをその折れた棒で叩き始めた。しばらくすると、白い布でくるまれた死体が墓の中から起き上がって、二人の方へまっすぐやってきた。二人はその死体を背負って姿を消した。ムジェマはびっくりして木から下りると、妖術使いたちがいた場所に行き、彼らのまねをしてみた。裸になって、一本の棒を折り、それで墓の一つを叩き始めた。するとほどなく死体が起き上がって出てきた。しかしムジェマは妖術使いではないので、その後どうしたらよいのかわからなかった。彼はびっくりして家まで走って逃げ帰った。しかし死体はどこまでも彼の後を追いかけてきた。ムジェマにはどうしようもなかった。屋敷の人々はこの異常な出来事にただ驚愕するばかり。さいわい数時間後に死体は姿を消して見えなくなった。

まあ、妖術使いたちはこんな風にして食料を調達しているというのである。別の話は、さらにぶっ飛んでいる。それによると妖術使いたちは特定の生きている人を選んで、彼に妖術をかけ、殺す。親族たちは犠牲者が死んだと思い、埋葬し服喪をおこなう。しかし実際には犠牲者は死んではおらず、妖術使いに別の場所に連れていかれて、そこで生かされている。彼らに肉を提供するためにヤギのように飼われているのである。「実際、交通事故で死んだと言われていた男が、タンザニアで生きているのがわかったことがある。彼は死ん

で人々は彼を埋葬したのだが、実は死んでいなかったのだ。」
さて人肉パーティであるが、長老の妖術使いたちが集まって座っている。４人の若者が調理係である。人の肉を土器の鍋で煮る。さらに肉を切り分ける係も１人いる。みんなで肉を食べ終わると、妖術使いたちは次回の集まりについて話し合う。実はパーティは回り持ちで、参加者の誰かが次回のホストとなって肉を提供しなければならない。予定された頃に、都合良く埋葬したての死体があることなどまれであるので、妖術使いは期日が迫ると犠牲者を選んで妖術で殺して、死体を調達しようとする。これに失敗すると、自分の身内を殺してその肉を提供し負債を返さねばならない。このあたりは妖術使いはなかなか律儀なのである。
また別の良く知られている物語では、人は意図せずに妖術使いの結社に入れられてしまうこともあるのだという。あるときブッシュを歩いていて、老人たちが酒を飲んでいるところに出くわす。いずれも顔見知りの老人たちである。酒を勧められ、もちろん喜んで加わる。傍のお椀には焼いた肉が入っている。酒の肴である。実は人肉なのだが、勧められた方はそうとは知らずに食べてしまう。彼が食べ終わったのを見るや否や、老人たちは突然口々に「私が誰だか知っているかい」と彼に尋ねる。「誰それさんでしょ。」「いやいや。」そう言うと、彼らは妖術使いの正体を顕す。そしてお前もお前がもっとも愛している身内を一人差し出せと迫る。もちろん拒む。そりゃそうだろう。妖術使いたちは突然姿を消す。見回しても誰もいない。男は驚いて家に逃げ帰る。しかし夜、眠りに入ると、あの共食の場面が再び出現し、老人たちは口々にお前の身内を差し出せと迫る。お前が一番大事に思っている者を。彼は抗う。「ああ、私には誰もいません。」「お前にはナイロビに行っている息子がいるだろう。彼を差し出せ。」「ああ、そんなことはできません。」彼の妻は夫が寝言を言っているのを聞く。「あなた夕べはまるでたくさんの人と話しているみたいだったわよ。」なんとこれだけで、彼はすでに自分の息子を差し出してしまっているのだ。ナイロビから突然その息子が休みをとって帰ってくる。「お父さん、さあこのお金をどうぞ。さあ、このお土産をどうぞ」短い休暇が終わって、息子はナイロビに戻る。しかしその帰途に交通事故にあって死んでしまうのである。町の死体安置所に置かれた死体は、やがて埋葬のために屋敷に戻される。
夜、妖術使いたちがその死体を食うために集まってくる。なんとその中には父親もまじっている。妖術使いの仲間になってしまったのである。例によって妖術使いたちが墓を叩くと、死体が墓の中から起き上がる。妖術使いたちは歌を歌いながら死体を共食の場に追い立てる。歌っている間は死体は歩く。歌をやめると死体は倒れる。
しかし実は、この共食に招待されなかった仲間はずれの妖術使いがいた。彼は怒って、自分の正体を隠して、死者の親族たちに真相を伝えていた。そこで死者の身内は夜中、妖術使いたちが共食の場へ死体を連れて行くところを警官とともに待ち伏せしていたのだった。妖術使いたちは全員捕まった。警察署まで死体を運ぶ際に、妖術使いたちは再び歌を歌って死体自身に歩いていかせた。警察での尋問が終わり、妖術使いたちは今度は死体をちゃ

んともとあった場所に戻すよう命じられる。「今は昼間なので死体を歩かせる術がつかえません。」「じゃあ、担いで運んで行け」警官の立会いのもとで妖術使いたちは自分で穴を掘りなおし、死体を埋めなおした。やはり昼間だったので術で死体を墓の中に戻せなかったからである。警官はたしかに死体が埋葬されたことを確認して去った。
一連の話は実におぞましくも恐ろしい話ではあるが、話し手も聞き手もどことなく面白がっているようなところがないでもない。最後の話など、どう考えてもフィクションだろう。実際、毎年多くの人が妖術を使って人を殺した廉で告発されているが、こうした人肉パーティに参加していたという理由で告発されたという例は聞かない。しかし、だからと言ってすべてが人を怖がらせて／怖がって面白がることだけを目的にした単なる「お話し」にすぎないのかというと、必ずしもそうとは言えない。
1989 年私が滞在中に死んだトゥイ老人の死の状況は、食人の宴の実在を人々に思い起こさせるものだった。トゥイ氏はそれ以前から妖術使いだという噂のある男であったが、ある日、自室で自分の太鼓のそばに倒れて死んでいるのが発見された。ちょうど近隣で一人の女性が亡くなり、その埋葬が済んだばかりのときであった。トゥイ老人のこの突然の死は、1984 年にこの地方にやってきて地域全体を妖術に対して封印した抗妖術の施術師、有名なマジュートの施術（後述）に関係付けられた。マジュートが封印した土地で誰かが妖術を使おうと試みると、その瞬間に一頭の羊が彼の前に出現して、妖術使いの頭を蹴る。妖術使いはその場で死んでしまうだろう。そんな風に人々は語っていた。トゥイ老人の死は、彼が妖術使いたちを呼び集めるための太鼓を打ったせいで、マジュートの術にかかってしまったのだろうと解釈された。人々が言うには、トゥイ老人は自信過剰だった。「マジュート？あんな若造が私にかなうとでも言うのかい？」そう言って妖術を使ってしまったのだろう。他の妖術使いたちは、マジュートの術を恐れて結局は賢明にもやってこなかったのに違いないと。実際にこうした食人の宴がありうると人々は考えてもいるのである。
社会の一般の人々からは見えないし聞こえない形で、妖術使いたちが他の妖術使いたちと通じ合って一つの勢力を作っている。その目的は、人間の肉――おまけに死肉――を食べるという異常な欲望を満たすことであり、そのために妖術使いたちはしばしば自分の身内である親族を犠牲に差し出さざるを得ない。これは人々が妖術使いのおぞましさについて語り、思い描く際の中核となるイメージの一つを提供している。

利己的な富の蓄積―キザの妖術

食人に限らず、利己的な欲望のために身内を犠牲にするというテーマは、妖術をめぐる語りに繰り返し現れるテーマである。ムハッソを用いた最強の妖術として語られるキブリの妖術においては、人のキブリを自由に呼び込んで殺害するキブリの瓢箪は、近親者とりわけ近い母系親族の死と引き換えにしか手に入れることはできないとされていた。妖術使いとはムハッソの力を手に入れる欲望に負けて、親族を殺す者である。同じテーマは妖術による富の蓄積という観念の中にも繰り返し現れる。先にムハッソの魅力と代価について述

べた際に、バンダ老人の若い頃の経験談を紹介した。金持ちになれるムハッソを求めて友人たちとともにタンザニアに行って施術を受けたが、施術を完了するためには最後に母親を犠牲にせねばならぬと知り、思いとどまったという話である。これはやや特殊な話であったが、より一般的に不正な富の蓄積と結びつけて語られる妖術にキザ（chiza）の妖術がある。

キザとは通常の施術の文脈では、朝晩浴びるための薬液（mavuo）を入れた搗き臼（chinu）や鍋（nyungu）で、施術師によって所定の場所に据えつけられたものを指している。しかし妖術の文脈では、富の増殖をもたらす目的で穀物庫（chiatsaga）の中に置かれたり、家畜囲い（chaa）の地面の中に埋められた人の死体（あるいはその一部）のことを意味している。もちろんキザとして置かれている死体は普通の人の目には見えない。妖術使いはこの目的で自分の息子や、とりわけ娘を殺害するという。このように殺されてキザとして置かれた娘は、周りの人々の目には気が触れてしまったように映る。地域の裕福な屋敷のいくつかには、このように「キザとしておかれた（kpwikpwa chiza）」と噂される子供がいる。

「自分の子供をとって、その子をキザとして置く。キザとして置くというのは、その子を殺して、まるでその子の気が触れたかのように、その分別が正常じゃないようにするということで、そんな風にしてお前は金持ちになる。たくさんのウシ、たくさんのトウモロコシ。そこのキティ（仮名）さんの屋敷は知っているだろう。そこにはすごく太った娘がいる。父親にやられたのさ。子供をひとりだめにして、でもそのおかげで、子供たちの残りはちゃんとした仕事を手に入れ、彼もたくさんのウシを所有しているというわけさ。」

「キザとして置かれた人を見たことがないって？ベンド（仮名）さんのところの娘さんを知らない？あの太った。いつもぶかぶかのズボンをはかされている。太った、おっぱいの大きなあの娘。人がやってくると『イヒ、イヒ、イヒ』。やってきて、人のことをやたらと触りまくる。ぶかぶかのズボンをはかされて、おしっこも垂れ流し、さてさて。トウモロコシの練り粥も地面から直接食べる。鶏みたいに。眠たくなったら、その場で布にくるまって寝てしまう。その布の臭いことといったら。分別を壊されて、自分のこともわからないのさ。（ベンドは）『ああ、この娘は病気なんですよ。いったい何をされたものやら、私には見当もつきません』などという。でもあの男は、自分がやったとわかっている。みんな言っているよ。あいつは自分の娘をキザとして置いたんだってね。あいつのヤギたちといったら、つやつやしている。お金もある。鶏もいる。なに不自由ない。」

もっとひどいケースもある。

「キナンゴのある男の屋敷だが（実名は挙げず）、そいつには子供がいるのだが、腹が膨満する病気に捕らえられて死ぬ（註 膨満）。毎年のことだ。さて、一人が膨満に捕らえられて、死ぬ。毎年。一人が死ぬと、また別の一人が死ぬ。そして何年かして、また一人が死ぬ。たしか４人ほども同じ病気で死んだ。不審に思った子供の一人が占いに行ったところ、あなた方の父親が子供たちを殺していっているのですよ。一人子供が死ぬたびに、そいつの寿命が延びて、ウシが増える。そうじゃないかい？そいつは彼らをキザとして置いてい

たというわけさ。なんと浅ましいことじゃないかい？というわけで子供たちは防御施術をひそかに施した。それ以来、毎年子供の誰かが死ぬこともなくなった。すっかりね。」
もちろん誰もが裕福になることを望んでいる。しかし自分の子供を誰か犠牲にしてそれを追及することは、ある男が用いた言い方にならえば「獣の心」の持ち主のすることなのである（註 ウングリジ）。
２００７年には、この種の妖術に「悪魔崇拝（devil worshipping）」という新手のヴァージョンが付け加わっていた（註 悪魔）。携帯電話のある番号に電話をすると、用件を問われる。そこで金持ちになりたいと告げると、お前は引き換えに何を差し出すのかと問われるのだという。「ちょうど年寄り連中が金持ちになるために自分の子供を異常児（vyooni）にするように。ただ、子供だけじゃない。お前自身の身体の一部でもいいし、もちろん子供でもいい。お前の子供あるいはお前の母親を差し出す。お前自身が金持ちになるようにと。」こうして融資を受けることができるというのである。彼らの目的は、貧乏人たちをこのようにして自分たちの悪魔崇拝の教会に加入させることだ。普通の教会には昼間参加するものであるが、彼らの教会では集会は夜に開かれ、そこでは人々は裸になって礼拝し、人肉と人の血の食事が出される。教会に入るときにも正面を向いてではなく、衣服を脱いで、後ろ向きになって入っていく。この話で盛り上がっていたとき、居合わせた青年の一人が、自分はその電話番号を知っているといって、みんなの前でかけてみせた。相手が出て、どのようなご相談ですかとスワヒリ語で応えた。青年が、自分はお金がほしいと応えると、電話は一方的に切られ、その後同じ電話番号にかけても着信拒否になっていた。相手が誰なのか私には確認するすべはなかったが、おそらくこの種の迷惑電話にうんざりしていたに違いない。
今世紀に入ってこの地域でも携帯電話は急速に普及したが、人々の想像力はこの新しいメディアの背後に再び昔ながらの妖術の世界を描き出したようである。携帯電話を通じてコンタクトできる悪魔崇拝者の結社は、上で紹介した妖術使いの結社のイメージを反復している。

夜の裸踊り

ムハッソについての豊富な知識をもち、ムハッソを駆使する技能者というイメージとは裏腹に、妖術使いはまた実におぞましく嫌悪を催させるような仕方で犠牲者を攻撃するとも想像されている。つまり彼らは夜、全裸で犠牲者を攻撃しにやってくるというのである。ドゥルマ語で「妖術をかける」という意味の最も一般的な動詞はクロガ（ku-loga）であるが、スワヒリ語で同じ「妖術をかける」という意味をもつ動詞クアンガ（ku-anga）は、この地域ではもっぱら全裸で犠牲者を攻撃するという意味で理解される。同様に妖術使い一般を指すドゥルマ語ムツァイ（mutsai）に対して、ムァンガ（mwanga）といえば、とりわけ夜、裸で攻撃をかけてくる者を指す。墓場から死体を連れ出す際にも、人肉の宴の際にも彼らが裸であると想像されていたことを思い出そう。夜、裸で行動するというのが妖術

使いの基本的行動モードなのである。
彼らは、たとえば、夢の中に全裸で現れて犠牲者を組み伏したりする。いつも後ろ向きになってやってくるので、犠牲者には妖術使いの正体はわからない（註 正体）。占いで妻の病気の原因が妖術ではないかと伺いをたてている男の次の発言に見られるように。
「私の考えではこうです。こいつ（妻）の身体のなかに、錨のようなものが置かれている。というわけで施術をうけるとかえってひどくなる。夜通し、病人そのもの。そして（夢の中に）そいつがやって来るのです。小屋のなかに後ろ向きに入ってきて、彼女を組み伏す。こうした問題のすべてを引き起こしているのは、この妖術使い（mwanga）なのです。」
あるいは妖術使いは、夜、犠牲者の小屋の周りで全裸で踊りを踊ることによって、犠牲者を死に至らしめることもできる。次の物語はこの地域では良く知られている。
「ムァワヤ（仮名）さんを死なせることになった出来事。その日彼は兄の家でヤシ酒を飲んで帰って来た。一人で小屋の裏手に行って水浴びをすませ、（夕食の）ワリ（トウモロコシの練り粥）を食べ終わる。（妻に）『おい、お前。頭痛がする。』『ハイ、ハイ。』早々とベッドに入った。夜中に目が覚める。大声が聞こえる。小屋の外で大勢の女たちがキフドゥ（服喪の際に夜毎歌い踊られる卑猥な歌詞をもった音楽）を歌い踊っているのさ。嬌声（njerejere）、そしてルンゴがジャッジャッ（註 ルンゴ）。服喪が開かれている？いやいや。扉を開いて、小屋の外に出る。ジー、物音一つしない。小屋に戻って扉を閉める。キフドゥ！外に出る。ジー、誰もいない。なんと彼自身の服喪のためのキフドゥだったのさ。朝になる。『ムァワヤ、いつまで寝てるの』妻が起こしにやってくる。彼はシーツをかぶったまま動かない。手足を突っ張らせて。『ああ、ああ、なんてこと』」（一部省略）本人が死んでしまっているのに、彼のその夜の経験がどうしてわかるのか、などと無粋な突っ込みは控えておこう。日本の「本当にあった怖い話」などと同様に、それは実際にあったとしてもおかしくはないと誰もが考えるような経緯を物語っている。
私が調査している村（近隣）に 1992 年にモスクが建てられ、ポコモ人の導師が派遣されて住んでいたのだが（註 モスク）、1995 年にこの導師から、近所の妖術使いに攻撃を受けたが撃退したという話を聞かされた。それによるとやってきたのは近所でも妖術使いだと皆から噂されているンゴメ（仮名）夫妻だった。一回目はンゴメ一人でやってきた。導師は身体の自由を奪われたがコーランの章句を唱えて撃退した。二回目はンゴメは彼の第二夫人とともにやってきた。二人とも裸で背中合わせに尻と尻をくっつけて導師の小屋の周りを踊った。しかし中では導師はコーランを開いてその章句を唱えていた（註 裸踊）。ンゴメたちはその仕事を終えて、自分の家に帰り着いたつもりになった。しかし扉を開くと、そこは導師の住んでいる小屋そのものだった。導師は彼にこんな時間（夜中の 2 時頃だったという）に何の用だと尋問し、ンゴメたちは自分の裸を恥じて退散した。導師は彼を捕まえるのは勘弁してやったという。
夜中に裸で犠牲者の小屋の周りで踊るという奇怪なイメージだけではまだ足りないかのように、妖術使いはさらに驚くべき仕方の攻撃を用意している。犠牲者が眠っている間に彼

あるいは彼女と性交する（註 オンドレラ）。男性の妖術使いだけでなく、女性の妖術使いも、ヴァギナの中にムハッソによって作ったペニスをもっており、それを用いて相手を「犯す（ku-henda muche、文字通りには「女する」の意味）」。あるいは女性の妖術使いは、ムボロヤディヤ（mubolo ya diya）つまり「イヌのペニス」という名前をもつ特有の悪臭がある茸をペニスの代わりに陰部に立てて、相手を「犯す」のだとも言われている。ムァミンバ（mwamimba）と呼ばれる妖術による病気は、これがもたらしうる最も深刻な結果のひとつである。犠牲者が男であると女であるとを問わず、まるで妊娠したかのように腹部が膨満し――だが腹の中に子供はいない――死にいたる病気だとされている（註 ムァミンバ）。女性が女性を、あるいは男性をムハッソによって獲得したペニスで犯すという強烈なイメージは、妖術使いをまさに性的に倒錯し逸脱した存在として描き出す。
1980 年頃にあったとされる、この行為に及ぼうとしている現場を押さえられたンジラ（仮名）という女妖術使いの話は、何人もの人から繰り返し聞かされた。以下の抜粋は、ンジラの姉妹の息子の妻によって 1989 年に語られたものであるが、語り手の夫（ンジラの姉妹の息子）自身もンジラの犠牲者の一人であったという。姉の度重なる攻撃に我慢できなくなったンジラの弟ムァディロ氏（仮名）は、施術師をやとって密かに自分の屋敷に妖術防御の施術（後述）を仕掛けていた。そうとは知らずンジラは再び弟の屋敷に妖術をかけにやってきて、ついにその正体が暴露されたというのである。

ンジラは自分の僚妻（一夫多妻の家族での夫の他の妻）たちをすっかり滅ぼしてしまっていた。ンジラが彼女たちを犯した（ku-henda achetu）せいで。ンジラは彼女たちを殺してしまった。一体どうしたらいいだろう。ンゴメ・ミンギ（ムァンゴーニにいた高名な防御施術の施術師）を呼びに行った方がいい。ンジラはムァディロの妻の一人もすでに犯してしまっていた。あのバカリ（仮名）の母親ニヘンジ（仮名）だよ。どうしたらいいだろう。ンゴメ・ミンギを呼びに行った方がいい。こうしてンゴメがひそかに呼びにやられた。あの女（ンジラ）は屋敷に施術師がやってくることを知らなかった。....
そんな訳で、あんた、ンゴメによってその屋敷は施術されたのさ。ベムロンゴ・マラハ（仮名）の屋敷へ通じる道、故ゴロファ（仮名）の屋敷に通じる道、街道に通じる道、それからムリョカ（仮名）の屋敷をとおってキナンゴにいく道の分岐点、こういった場所に（ムハッソによって）防御が施された（ku-kagbwa）。....
ムァディロが言うことには、「私の子供たちはンジラにいいようにされている。あいつの妖術のせいで、例えば（子供たちが）仕事（を求めて）いっても、ろくな仕事につけない。キドゥマヤ（仮名）の子供も、ズマ（仮名）も、私の妻も皆健康を害している。占いにいったところ、お前の姉が彼らを犯した（ku-henda muchetu）張本人だ、と言われた。現に今も、私の妻は毎日（性器からの）出血（muruwo）があって、止らない。血が出ていくばかりだ。」こうしてンゴメによってその屋敷に防御が施されたんだよ。その夜ンゴメは事を終え、その日のうちに立ち去った。キナンゴにいって、そのままムァンゴーニへ帰った。

仕事を終えキナンゴにつくと、もうバスに乗込み自分の家へ帰っていった。
ンジラはそんなことはすこしも知らない。屋敷が防御されたとはすこしも知らない。服を脱ぐと、「あの馬鹿どもに妖術をかけて（ku-anga）やろう。」まさにその夜の事じゃないかい。「行って、あいつらを犯してやろう」ってね。ところが、あんた、海なんだよ。屋敷じゅうが、ざぶーんざぶーん（chuu chuu 波の音）。こっちに来れば波がしら。もう腰がぬけて。裸で。（身体を覆う）布すらなしで。あのそれを使って人々を犯す「モノ（dzidude）」が、（陰部から）ニュッと出てきて、ぶらぶらしているんだ。中に戻らないで、ぶらぶら。さて、あんた、日がのぼったよ。彼女は自分の兄弟を呼んだ。「ムァディロ、ムァディロったら。こっちに来て、私を助けてよ。どうして屋敷の中に何も見えないの。」夜があけて、太陽が８時の位置に達した。ムァディロは近所の人々を呼びあつめた。キナンゴの市場（chete）に来ている人々も呼びあつめた。「皆さん、ごらんなさい。来て、見てごらんなさい。あなたがたにンジラが妖術使いだと言ったら、あなたがたは『ムァディロは身内に濡れ衣をきせている』と仰いましたね。さあ、来て見てごらんなさい。」ムァディロの屋敷は人でいっぱいだったよ。
（ンジラは）腰をぬかしたまま。弟のムァディロにひっぱたかれて、やっと正気に戻った。だって、（彼女は）自分がどこにいるんだか分らなかったんだもの。そこらじゅう、屋敷一面が海なんだよ。自分が死んでしまうと思ったんだね。ンゴメ・ミンギが仕掛けておいたムバレのせいだと知らなかったんだね。平手打ちをくって、彼女は目を開いた。そこでムァディロが（身体を覆う）布を投げてよこしたのさ。
「例のモノ（dude riro）」は内側には二度と戻らなかった。そのまま腐った。これが彼女を死にいたらしめた病気となった。蛆までわいて、そんな状態で彼女は死んだんだよ。

多くの人に目撃され、同じような形で語られているこの事件に働いた物語化の力については、今となっては知ることは困難である。当のンジラの目に映ったその夜の屋敷の有様を、なぜンジラならぬ語り手が知りえたのかといったことを考えただけで、そこに働いていた物語化の力の強さを推し量るには十分であるが、もはや、当の事件そのものが実際にはどのようなものであったのかをこの物語とは独立に語ることを可能にする手がかりはない。こうした物語に回収されることを可能にするような何かが、問題の出来事にはそなわっていたのだろうと推測するばかりである。妖術の語りは、ある種の出来事をその物語の枠組みに吸引する強い力をそなえている。

動物との異常な親和性
すでに触れたように、妖術使いは動物に変身できるとされているが、同時にある種の動物を一種の使い魔として使役したりすることもできると考えられている。妖術使いはコウモリやさまざまな昆虫を使役して、それらに人々の富をすこしずつ掠め取って集めてこさせる。妖術使いは、その術をかける際にさまざまな物を媒体として用いる――それらはキリ

ャンゴーナ（chiryangona）と総称される――が、その中でも犠牲者に向かって「投げつける（kutsuphira)」つまり送りつける物のことをマカファラ（makafara）と呼ぶ（註 カファラ)。ここでも動物は重要な位置を占め、とりわけハト（ngiya）は使い魔としてさまざまなマカファラを送り届ける役目を果たしたり、それ自身マカファラとして送り付けられたりする。野生動物とのこうした異常な親密性も妖術使いのイメージの顕著な特徴である。本来の仲間である人間、とりわけ身内を裏切ったり、食べたりする反面、本来は狩られる対象である動物たちが仲間になっているというわけである。
屋敷にこれらの動物がやってくることは妖術使いの攻撃を受けていることの紛れもない証明である。
「彼女（死亡した娘）がどこで妖術にかけられたんだか私にはわからない。でもハト（ngiya manga）がやって来た。やって来て彼女の小屋の戸口の庇に止まったのさ。子供たちは、ハトだハトだ。棒を投げつけた。そうするとハトはブルルッ、飛び去ったのさ。占いに行って、なんて言われたっけ？そうなんだよ。（占いで指摘されたとおり）その前にも野生のブタが真昼間、太陽が真上にある時間にやってきた。わー、ブタだ、ブタだ。子供たちは大騒ぎ。ブタは去った。それから何日もたたない。今度は陸ガメだよ。自分の家を背中に背負った陸ガメ。そいつは子供たちの小屋には入らなかった。でも、あんた、野生のブタが真昼間に屋敷に入ってくるなんて、今まで聞いたことある？」
一見幻想的にしか見えない変身譚ですら、現実の陰惨な殺人事件のなかに、まるで当たり前のように織り込まれる。1994 年の 3 月 3 日、あと 10 日ほどでフィールドを出るというときになってマラリアを発症してしまいちょっと憂鬱になっていた私のもとに、調査地域からちょっと離れたムバジの村で前日にマレジェ（仮名）という老人が孫息子にマチェーテで殺害されたという知らせが飛び込んできた。彼はかねてより妖術使いだと噂されている人物であった。この知らせが最初に伝えられたとき、私の小屋に居合わせた人々は、マレジェは近隣の人々全員に殺されたのだと言い合った。孫息子は近隣の人々に頼まれて、お金をもらってマレジェ老人が森に入ったところを、こっそり後をつけて殺したのだろう。妖術使いにとっては当然の報いだと。この知らせを伝えた青年は、キナンゴの町でも人々は孫息子の行為を良くやったと賞賛していると付け加えた。私の友人は、妖術使いをさっさと殺してしまうという隣接したギリアマ人のところでは当然なされていたことが、やっとドゥルマでも行われはじめたのだとうれしそうに語った（註 ギリアマ)。しかしその日の夕方に入った知らせは、事件の相貌を一変させた。マレジェ老人の埋葬が翌日行われるという知らせだったのだが、その使者がいうには、殺害したのはまだ 10 歳くらいの子供である。少年が言うことには、森で小屋を建てるための細い木を切り出していたのだが、ライオンに襲われ、無我夢中でマチェーテを振るってライオンを切り殺したら、そのライオンが人間に変化した。見ると自分の祖父であったというのだ。泣きながら帰ってきた少年の話を聞いて、屋敷の人々が驚いて現場に行くと、マレジェ老人が人間の姿で切り殺されていた。少年は自分が祖父を切り殺したことに混乱して、まだ泣きじゃくっていると。

私にとっては、話は突然荒唐無稽でありえない姿をとり始めたのであるが、周囲の人々にとってはこれですべてが釈然となった。近隣の人々が金を出しての委託殺人などという話はすっかり吹っ飛び、マレジェ老人の自業自得話へとすべてが回収された。この年は雨が不良で人々は飢饉に苦しんでいた。きっとマレジェは肉が食べたくなって、ライオンになって自分の孫息子を食べようとしたのだが、逆に返り討ちにあってしまったに違いない。たしかに 10 歳の子供に祖父を殺さねばならないどんな理由があるだろうか。ライオン話は少なくともこの点では合点がいくのだ。
翌日は埋葬だったのだが、遠方であったこともあり私も友人たちも埋葬には参加しなかった。3 月 5 日の夕食時に、近所の女性が新しいニュースをもってきた。この日、マレジェの墓が警察によって掘り返され、その死体がモンバサに運ばれたらしいというのだ。おそらく検死のためだろうという。「お前も警察の車がその街道を通り過ぎるのを見たはずだ。」残念ながら私は警察の車が通り過ぎるのを見ていなかった。しかしこの女性は、もう一つの噂話を付け足すのを忘れなかった。なんでも前日の埋葬のおり、マレジェの死体を墓穴のなかに入れて処置をする際に、墓穴のなかでその仕事に従事した青年がマレジェの足の一部が再びライオンの足に変化しつつあるのを見たというのである。警察が墓を掘り返したのは、それを確かめてライオンに襲われたと言う少年の主張を裏付けるためだというのだ。いや、それはないだろうと私は思った。
現実に起こった殺人事件が、私の目の前で、荒唐無稽で幻想的な変身譚に絡めとられていくのを、私は唖然として眺めていた。私が唖然としたのは、単に私にとってはまさに荒唐無稽な物語が真実の話として急速に受け入れられていったからというだけではない。自分のいるところから徒歩でほんの数時間のところで起こっていることでありながら、流通しているメッセージと、それが語っている出来事との照合を行う手段がほとんどないというその事実に唖然としたのである（註 実証）。こうした照合の手段と可能性を誰もが欠いているとき、本当であったとしてもおかしくない話が、同様に本当であったとしてもおかしくないさまざまなディーテイルを論拠として動員しつつ、真実の立派な代用品として流通できることになる。
動物を自分の手足の如く自由に使役し、動物的アイデンティティをあわせもつ妖術使いというイメージは、驚くべきことではあるものの、十分に現実的な可能性として捉えられている。だからこそ、それは現実の事件を容易に絡めとる物語としての吸引力をもちうるのである。

妖術使いのイメージ
密かに集まって死肉を食らい、真夜中に裸で踊り、倒錯した性によって犠牲者に死をもたらし、自由に動物に姿を変える、こうした一連のイメージで妖術使いが語られているとき、人々はまるでムハッソの概念については、すっかり脇に退けてしまっているかのように見える。ムハッソについて語るとき、人々は妖術使いがアクセスできる驚くべき力の源泉の

ことを考えている。それに対して上で紹介した一連のイメージによって、人々は妖術使いの本性――通常の人間とは根本的に異なった存在としての――の方に注意を向けているのである。
しかしもしこの一連のイメージのなかに人々の独創的で奇抜な想像力を見て取るとしたら、それは誤りである。これらのイメージを特徴付けているのは、むしろそのあまりにの月並みさの方なのである。妖術使いの観念の存在が報告されているアフリカの他の社会に目を向けると、驚くほど類似したイメージに出会う。
バイデルマンが報告するタンザニアのカグルー人の間で考えられている「夜踊る者」と呼ばれる妖術使いは、犠牲者の家の前庭で夜中に裸で踊る。近親相姦を犯したり、人を殺してその肉を食べることによって人は妖術使いになる。人肉に対する異常な嗜好をもち、ハイエナを使って墓を暴いて死体を食べる。新鮮ならば自分たちで食べ、腐っていればハイエナに与える。彼らは秘密の結社を作っており、その活動は家族の者にすら気づかれない。彼らは常に逆転した振る舞いをする。夜間活動し、移動するときは常に裸で、歩くときは逆立ちして歩く。握手を通じて犠牲者を一種のゾンビに変え、思うままに使役する。犠牲者の親族は、犠牲者が死んだと思い、バナナの茎を犠牲者だと思い込んで埋葬するのだが、実は彼は妖術使いの労働力として彼の畑を耕し、妖術使いに富をもたらすのである。動物を使い魔として瓶に入れて穀倉などに隠しており、夜間に彼らを引き連れて移動する。ハイエナの腹にしがみついて、遠距離を一瞬で移動したり、アリクイを使って犠牲者の家に忍び込んだりする（Beidelman 1963）。
ウィンターが報告するウガンダ西部のアンバ人が抱いていた妖術使いについてのイメージも似通った特徴を持っている。そこでは人々は人肉に対する嗜好が妖術使いを突き動かすと考えている。彼らは結社を作って人肉の宴に互いを招待しあうが、ごちそうになった者はいつかはその借りを返さねばならない。この肉の負債を返すために彼は自分の身近な人々を犠牲者に選ぶ。また妖術使いは、夜間、裸で活動し、豹に変身したり、豹を使い魔として使役する。逆立ちで歩き、疲れると木の枝からさかさまにぶら下がって休む。喉が渇くと水ではなく、塩をなめる。「妖術使いの行動は単に通常の人々とは異なっていると考えられているだけではない。それは正確な逆転である。」とウィンターはコメントしている。（Winter 1963:292）
カメルーンのマカ人のあいだでは、妖術使いたちは夜の人肉の宴を開くが、それに参加する資格は自分の両親を犠牲として差し出すことによって得られる。この宴で妖術師たちは自分たちの親族の心臓を食べる。翌日犠牲者は病気になり、施術師の治療をうけなければ死ぬ。またこの宴の際に妖術使いたちはマカ人が最もショックを覚える行為にふける。男は男と、そして女性は女性同士で愛し合うのである（Geschiere 1997:40）。
類似したイメージは、単にアフリカ内部に限られたものでもない。ノーマン・コーンはヨーロッパ中世の魔女に向けられた同様な非難の源流を、２世紀のローマ社会に遡ってみせる。そこではキリスト教徒たちは、幼児を殺して皆でむさぼり食い、母親や姉妹との近親

相姦にふける秘密の集会を開いていると、繰り返し非難されていた。キリスト教徒たちに対する迫害の背後にあった大衆の憤りは、一部にはキリスト教徒たちのおぞましい習慣として想像されたこうしたイメージによってかき立てられていた。177 年には、投獄されたキリスト教徒たちが所有していた奴隷の証言――拷問という手段で得られた――により、幼児殺しと人食い、近親相姦的乱交が暴露されたことから、大規模な迫害が進行した。一時はキリスト教徒の友人を保護しようとした穏健な思想の持ち主までもが裏切られたと感じた。キリスト教徒たちが実際に人喰いであることに何らかの疑いをさしはさむ人々は、もはやほとんどいなかった。反逆罪の場合でさえも行われた通常のローマの慣例に反し、処刑されたキリスト教徒の死体は埋葬すら拒絶され、焼かれてその灰はローヌ川に捨てられたのである（Cohn 1973:4)。さらにコーンによると、キリスト教が国教となって以降は、この同じイメージが今度はキリスト教的世界における異端に対する想像として復活する。8 世紀のアルメニアで隆盛をほこった異端のパウロス主義者は「夜陰にまぎれて密かに集会を開き、そこで自分たちの母親との近親相姦にふけっている」とされていた。「赤ん坊が生まれると、その子は集まった人々の間を次々に投げ渡されて、最後にその赤ん坊が死んだときそれを抱いていた人が、セクトのリーダーになる。これらの幼児の血は小麦粉と混ぜられて聖体のパンにされる。」というのである（Cohn 1973:37)。闇にまぎれての集会、近親相姦的乱交、赤ん坊の殺害と人喰いの一連のイメージは、16 世紀の魔女狩りに至るまで、異端の脅威が感じられる都度、それらの異端の実態に対する想像として繰り返し浮かび上がってきた。コーンは、「社会の内部に、社会の存在を脅かすばかりか、とことん忌むべき、文字通り非人間的な振る舞いにふけっている隠れた集団が存在している」という「妄想」（Cohn 1973:ix）――アフリカにおける妖術使いのイメージはまさにその一種に他ならないのだが――の系譜を追っているのだが、そこに見られる判で押したような代わり映えのしないパタンの繰り返しは、単なる伝播や先人の言説のコピーによるばかりではない（註コーン)。コーンが指摘しているように、近親相姦も人喰いもほとんどすべての社会において「人間の本性に反した」「反自然的な」行為とみなされている。また「無力な存在ではあるが未来の担い手でもあり、保護され養われるものである」赤ん坊や幼児を「殺して、自分自身の栄養とするために用いること」も同様である。まさにこのことから、それらはそのような行為にふけっている特定のグループを反人間の化身、人間全体の敵として描くのに実に似つかわしいのである（Cohn 1973:12)。それは多くの社会で人間のあるべき姿がどのようなものだと考えられているかの裏返しのイメージであり、それによって人々にとって邪悪が想像される際のステレオタイプとなる。

アフリカの多くの社会における妖術使いのイメージについても、研究者たちはそれらが、いかに当該社会におけるまっとうな人間の姿を反転させるイメージ操作の産物であるかを指摘してきた。先に紹介したカグルー人についてもバイデルマンは、親族を非親族のように性交の対象としたり、人を動物であるかのように食料とする反面、逆に動物とは過剰に近い関係を結ぶ、そして昼ではなく夜に活動し、逆立ちで移動するといった妖術使いの振

る舞いが「物理的にも、社会的にも、道徳的にも転倒したもの」であると述べている（Beidelman 1963: 67)。ジャクソンが総括しているように「妖術使いについてのこれら一連のよく見られるステレオタイプは、理想的な社会行動とみなされるものをシステマティックに反転させるという論理的操作によって作られている。」(Jackson 1989:91）もし妖術使いや魔女――そしておそらく今日の人々から疑いの目で眺められる怪しげな宗教カルトの一部――が密かに行っているとされていることがらについてのイメージが互いに驚くほど似通っているとすれば、それは、反転という論理的操作によってそれらのイメージを生み出す際のもとになった観念、まっとうな人間社会の秩序とそこで人はどのように振舞うべきかのイメージが、多くの人間社会で似通っているからなのである。

もちろん地域ごとにイメージの細部は異なっている。ドゥルマの妖術使いは同じく東アフリカのカグルーやアンバのように逆立ちして歩くとは考えられていないが、一方小屋に入る際にはわざわざ後ろ向きに入っていくとされている。また近親相姦的な性関係は特には強調されないが、西アフリカのカメルーンと同様に、同性間の性関係――あるいはむしろ女性が男性として性関係を行うこと――が、彼らのおぞましい特徴となる。妖術使いについてそれぞれの社会がもっている一連の固有のイメージは、モニカ・ウィルソンが名づけたように、それぞれの社会の「標準化された悪夢」と呼びうるような理由を備えているかもしれないし、単なる気まぐれな着目点の違いから生まれたものかもしれない。いずれにしても妖術使いについての、一見おどろおどろしく奇抜な観念が、実のところ、人々が馴れ親しんでいる日常の秩序に対して、他愛のない論理的な操作を加えた産物に過ぎないことは明白なのである。

もちろん、妖術使いの観念が人々の想像力の産物だと言われても、誰も驚かないだろう。こうした人々と同じ想像力世界を共有していない我々にとっては、そんなことはわざわざ指摘されなくとも、最初からわかりきった話だからである。それはハリー・ポッターや指輪物語の登場人物や彼らの行為が､想像上のものだと言われても驚かないのと同じである。ファンタジーという言葉はそのためにあるようなものだ。それらが人々の想像力の産物であることを指摘したとしても、それだけでは問題の核心に迫ったことにはならない。問題は、それらが想像の産物であること自体ではなく、想像の産物であることが――少なくとも我々にとっては――見え見えであるそれらが、現実的な可能性として、身近な他者の実際の姿でもあるものとして生きられているという事実の方だからである。

この問題はいささか取り扱いに注意が必要である。というのも、我われは一応自分では、想像で生み出したものと現実との間には区別がつくと思っているからである。たしかに、ハリー・ポッターの世界を現実の世界と混同する者など、我々のあいだにはおそらくほとんどいないだろう｡こうしたポジションから眺めると､妖術使いの現実性について語る人々があたかもファンタジーと現実を混同してしまっている人々であるかのように見えてしまう。しかしこれは二重の意味で誤っている。第一に、妖術使いとその振る舞いを現実の一部として語る人々も、彼ら自身のファンタジーを別にもっていて――ドゥルマの民話の中

には、怪物たちやそれに食べられてまた生き返る主人公や、彼が乗り回す空飛ぶ編み籠の話やら、殺されて皮をはがれて太鼓にされそのリズムによって殺害者の正体を暴露する登場人物やらで溢れている――そうしたファンタジーを現実と取り違えたりする者など誰もいない。第二に、このようなポジションで語る際に、我われは我われ自身にとっての現実がいかに想像的に構築されたものであるかという点を忘れている。つまり問題は、ファンタジーと現実を混同している人々がいるかどうかではなく、同様に想像的に構築されたものが、なぜ特定の社会空間においては単なるファンタジーにしかならず、別の社会空間では現実的なものとして扱われるのかということである。妖術使いのイメージに対して、誰もが「話としては面白いけれど、そんな奴そもそもいないし、そんなことありえないから」と切り捨てることができる社会空間と、「まさかとは思うけれど、もしかしたらそういう人間がいるかもしれないし、そういったことも起こりうるかもしれない」を経て、「たしかにそういう人間が潜んでおり、そういったことが実際起こるのだ」にいたる一連の社会と言説空間のあり方の違いが問題なのである。
現在の日本の社会で真面目で誠実な研究者かつ教育者として通っている浜本（仮名）の正体が暴かれ、本当は陰であんなことやこんなことをしているとわかった場合を想像してみよう。この「あんなこと」「こんなこと」に何を代入すれば、外見はどこから見ても非の打ち所のない浜本（仮名）が、にわかに唾棄すべきおぞましい存在になってしまうだろうか。脱税や万引き程度では――職は失うだろうが――ダメージはそう大きくない。KGB のスパイであると言うのでは、妖術使いで墓を暴いて死体を喰っているとか、夜中に裸で踊っているというのと同じぐらい現実味を欠く。盗撮、痴漢、セクハラ、その他任意の所業を代入していけば、可能性と不可能性、もっともらしさと嘘くささなどの軸の交差のなかに、今の日本社会における日常性の背後の邪悪の姿が現れてくるかもしれない。おそらく妖術の想像が妖術使い像を結ぶのも、こうした仕方でなのであろう。現在の日本で誰かを「鬼」だと呼ぶことは、その人の他人に対する仕打ちのひどさについての単なる比喩以上のものではない。けっしてその人が文字通り角を隠し持っていたり、実は毛むくじゃらであったりといった獣属性の持ち主であるということも、こっそり人をさらっては食べているというということも意味していない。鬼であると呼ばれて「成敗」されてしまうような社会ではないのである。妖術信仰の問題を考えるということは、人を鬼と呼ぶことで、その隠れた本性が暴露され、成敗の対象にしてしまうことを可能にするような、どのような社会的プロセスがありうるだろうかと考えることだと言ってもよいだろう。

よごれを盗む者たち――万人に開かれた妖術
ここまで紹介した妖術をめぐる対極的な語り口においては、いずれにおいても、妖術使いは普通の人々とは根本的に異なった特殊な存在として描かれていた。妖術使いは、普通の人々にはアクセス困難な知識や手段の持ち主であるか、常人の理解を拒むおぞましい嗜好

と振る舞いによって特徴付けられていた。もちろん、これらの妖術使いは普段は近隣の人々に混じって、あるいは身内の一人として、その本性を隠して何食わぬ顔をして生活していると考えられている。しかし、もし妖術がこうした特殊な人間たちによってではなく、ごくありふれた普通の人によって行使されてしまいうるとしたら、それは人々にとってはるかに厄介な問題ではないだろうか。上で紹介してきたような奴らがいたとしたら、それだけでも十分に面倒な世界である。それがますますややこしくなるようなことを誰も好きこのんで招じ入れたりする訳もなかろうが、人々の語りの中ではこの可能性はあっけなく現実性に転じてしまっている。まず第一に、妖術使いを雇うという可能性によって、第二に、「汚れを奪う（ku-wala nongo)」という観念によって。

ムハッソの知識のない一般人でも、妖術使いに依頼して誰かを攻撃してもらうことができるという考え方が存在することは、そう驚くにはあたらないだろう。海岸部のイスラム教徒のジネ（イスラム教で知られているジン）の妖術使いを雇っての攻撃は良く知られているし、タンザニアに行けばそうした殺しを請け負ってくれる妖術使いがいるという話もよく聞く。というわけで一見手軽な攻撃手段に見えるのだが、実際には、もし誰かがこの手で誰かに攻撃を加えようと考えたとしても、すぐに壁にあたってしまうだろう。そもそも依頼者はそういったことを頼める妖術使いを知っていなければならない。プロの殺し屋に殺人を依頼するというアイデア自体は広く知られているわが国でも、実際に一般人がそうしようと思っても、そもそもプロの殺し屋に伝がなければまるで現実味がないのと同様である。プロの殺し屋に伝がある人がいるとすれば、その人はもはや一般人とは言いがたい。同じように妖術を依頼できる妖術使いに知り合いがいるような人物は、それだけですでに十分に妖術使いの仲間である。人肉の宴の話の中にも見られるように、妖術使いは互いに結託しているという観念があり、攻撃においても協力しあうとされているのだが、そうした一味の一員であると述べることとたいして違いはないことになる。しかしいずれにしても、妖術による攻撃を警戒する側から見れば、この考え方は用心するべき敵の裾野を一気に広げていることには間違いはない。

二番目の「汚れを奪う」というやり方においては、ムハッソの知識がいらないだけでなく、妖術使いの知り合いである必要もない。地域の人々にとっては身近な、一種の聖所ともいえるムズカと呼ばれる場所を利用する。

この地方には(ドゥルマ地域に限らず、ミジケンダの人々が住む地域全般にあてはまるが)、むやみに入ったり、そこの木を伐採してはならないとされている小森があり、そうした森の中の大木（バオバブの木が多い）や大きな岩、洞窟はムズカ（muzuka）と呼ばれる特別の場所になっている。乾季にも水が枯れることのない深みに面した岩や洞窟のなかにもムズカとされている場所がある。

ムズカは霊の棲家であるとされているが、どのような霊が棲んでいるのかについては曖昧なところもある。憑依霊の一種であるライカやシェラの棲家とされており、これらの霊に奪われたキブリを取り返しにいく「嗅ぎ出し（kuzuza)」の施術で人々が向かうのもこうし

たムズカの一種である。イスラム系の霊――たとえばムギシ(mugisi) をムズカの主と呼ぶ人もいる――が棲んでいると考えられているムズカもあり、そこに近づく際はモスクに入るときのように履物を脱ぎ、スワヒリ語で語りかける。他のムズカにおいては、そこに棲む霊についても単にムズカと呼ぶ場合もある。ムズカと特定の種類の霊との結びつきは必ずしも排他的だとはいえない。同じムズカが、「嗅ぎ出し」の施術ではライカの棲家と看做され、別の施術においてはイスラム系の霊の棲家とみなされるといったこともめずらしくない。雨がしかるべき時に降らない場合には、天空の神ムルング（mulungu）が人々の振る舞いに怒って雨を止めている可能性があり、同じ近隣（lalo）の人々は、地域のムズカを巡回して雨乞いを行う（註 雨乞い)。人々はムルングの黒い（濃紺の）布を身に着け、ムズカごとに太鼓を演奏し、トウモロコシの練り粥を供え、黒い鶏（屠殺されずに生きたまま放たれる）や黒いヤギ（屠殺されその場で料理される）が奉じられる。雨乞いにおいては、地域のすべてのムズカとそこに棲む霊は、天空の神ムルングの仲介者であるかのように考えられている。

この雨乞いに明確に見て取れるように、ムズカは人々にとっては、もっぱら霊の世界に向けての祈願と交渉の場である。人々は折に触れて個人的にムズカを訪れては、商売の繁盛や健康をムズカに祈願する。多くの場合、なんらかの個別の霊を相手にというよりも、ムズカそのものが祈願の相手であるかのようにとらえられている。ムズカは危険な場所だとも考えられているので、軽々しく訪問できる場所ではないし、そこでの作法や禁止事項――ムズカによっては石鹸の匂いを嫌ったり、閉経期を過ぎた女性によって絞られたヒマの油をふりまくことを要求したりする、また月経期の女性や子供は入ってはならない等々――について自信がない場合は、詳しい知識のある施術師に相談して同行してもらうこともある。もちろんこれは必須ではなく、ムズカはむしろ一人で秘密の祈願をする場所というイメージがある。ムズカで、特定の祈願を行う際には、それがかなえられたときにしかじかの贈り物をムズカに対して行うと約束する。これはムズカに対する負債（deni）と考えられており、祈願が叶うと、すみやかに返す（kuripha）必要がある。ムズカに赴いてその脇で料理し、調理されたトウモロコシの練り粥や米と、約束していた贈り物――鶏であれ、ヤギであれ――を捧げるのである。ムズカの取立ては厳しく、返済が遅れると祈願した当人にさまざまな災いや死がおとずれるとされている。

「汚れを奪う（ku-wala nongo)」と呼んで人々が妖術（utsai）の一種とみなしている行為は、このムズカを利用した実に単純な技である。危害を加えたい相手の持ち物や、衣服の一部、毛髪、爪などを密かに手に入れて、それをあたかもムズカに対する捧げ物であるかのように、ムズカに置いて帰ってくる、それだけのことである。

「そいつはキナマナをとっていく。衣服であれ、布の切れ端であれ、こういった毛髪であれ。どんなものでもいい。それはムズカに置かれてくる。ズボンであれシャツであれ、もって行かれる。お前が破綻（bangarafu、英語の bunkrupt より）してしまうようにと。」

「汚れ」をムズカに置かれてしまった犠牲者は「この世にいるようでいないような（dza

kumo dza u mumo)」状態になる。体力がなくなり、寒気を感じる。何を食べても身につかず、やせ細る（乾いていく（ku-kauka)。いつも不機嫌になる。また犠牲者は、「良い汚れ（nongo mbidzo)」が奪われた結果として、「悪い汚れ（nongo mbii)」に塗れることになる。あるいは「悪い匂い（kungu mbii)」がするようになるかもしれない。文字通り臭くなるということではなく、これは彼の発言に対して人々が耳を貸さなくなり、無視される、邪険に扱われるといった状態をさしている（註 匂い)。さらに運あるいは暮らし向き全般も悪くなる。

ある占いでは夫婦仲の悪さが、妻の汚れが奪われたことに帰せられている。「お前さんは、汚れをもっていかれてしまったんだよ。お前の夫がお前と話をしても、お前が臭いと感じるように。...ところで、何か話をしても誰も返答してくれないということはないかい？例えば夫に何か相談を始めると、彼が急にそわそわし始める。まるでトイレに行くみたいにね。そして帰ってこない。どこかに行ってしまう。人に話を聞いてもらえないというのはどんな気持だい？そんな訳で、この子は自分が病気だと思っても、それを人に告げなかったりする。...この子の悪い汚れを取り除かせないとね。だって、自分が憎まれているのを知れば、お前さんの方でも他人と一緒にいる気が無くなるものね。」

本格的な妖術使いも、犠牲者の持ち物や毛髪など――これらはキナマナ（chinamana）と総称される――を手に入れて、犠牲者をムハッソを用いて攻撃する際の補助物・媒体――施術の際に用いるこうした品物をキリャンゴナ（chiryangona）と総称する――として用いることは、すでに紹介した。しかし「汚れを奪う」においては、それらを単にムズカに置いてくればよいだけなので、実に簡単である。誰でもその気になりさえすれば実行可能である。おまけに、こうしたものを手に入れることができるのは、犠牲者にきわめて近い人だけである。最も親密で身近な人物こそが、隠れた敵になるという厄介な真実――妖術使いについてのドゥルマの有名な諺「腰布の中のシラミこそ、お前を喰らう者である（tsaha wa vindoni ndiye akuryaye)」――を人に思い起こさせずにはおかないのである。

「汚れを奪う」という観念は、ドゥルマの人々にとっての妖術のハードルを一気に下げてしまうし、逆に隠れた敵の攻撃の可能性を一気に高めてしまう。実際、それはけっこうありふれた出来事として頻繁に人々が経験している攻撃である。それは占いにおいても、暮らし向き全般の不調の背後に最も頻繁に見て取られる攻撃である。

ある女性は前日の占いの結果を興奮気味に私に話してくれた。「うちの亭主が占いに行って見てもらったところ、ムズカ・コンゴ（註 コンゴ）にお前は置いてこられてしまったと言われたのさ。すごくよく当たる占い師だよ。だって実際そのとおりなんだから。彼女（占い師）の言うことには、その人物はかつてあなた方とすごく親密だったが、最近豹変したと。自分の友達の暮らしぶりが良いことに我慢ならなくなったのだと。というわけでその女は夫と連れ立って出発したと。実際、まさにその通りなんだよ。あいつらが旅に出なかったとでも言うのかい？私は彼らが３日間も家を留守にしていたのをこの目でたしかに見たよ。なんとムズカ・コンゴに行っていたんだね。（占い師が言うには）彼らは私の古い腰

布の切れ端を盗んで、それをそこに置きに行った。『お前もそこに行ってごらん。お前の腰布がそこにあるのを目にするだろうよ。』」どうやら彼女は占い師の言葉から、ただちに近所の最近夫婦で留守にしていた知人を自分を攻撃している敵と決め付けてしまっているようだ。もともと疎遠になっていたのかもしれないが、こうして妖術の疑いまで入ってきたとなると亀裂は決定的である。実にはた迷惑な占いである。
他の攻撃と併用されているのでない限り、「汚れを奪う」攻撃そのものは比較的簡単な仕方で対処可能である。たとえば次の占いでは、他の妖術は介在しておらず「汚れを奪」われたことだけが問題になっており、そのなかで対処方法についても語られている。

D: この小屋にはとても住んでいられない、なんて言いたくなっただろう？
C: まさにその通りよ。それこそ真っ先に考えたこと。だって、どうしてこんなことが起こるの？小屋の中になんでこいつらがやってくるの？
D: 小屋の中にコウモリが飛び込んできたりするんじゃないかい？
C: その通りよ。そのことの理由が聞きたくて占いに来たのよ。
D: コウモリはね、ただのムズカだよ。お前はムズカに置いてこられてしまったんだよ。汚れを取り戻さないとね。
C: 私自身がムズカに置かれた？
D: すぐにムズカにお行き。言って、こんな風に語るんだよ。『私はやって来ました。私の汚れをとっていったのが男なのか女なのか私にはわかりません。そいつは、私と私の子供たちのことを、ここに置いていったのです。私たちの暮らし向きが悪くなるようにと、健康がなくなるようにと、そいつは置いていったのです。そいつは罪人、でも私はそいつのことを知りません。私は今日、私と私の子供たちの汚れを取りに来ました。事態が好転したら、うまく行っているとわかれば、私はやって来ます。やって来て負債をお返しします。』ってね。そしてムズカのなかのフフト(fufuto ムズカの穴の中にたまっている枯葉やゴミ)をもって帰っておいで。そしてそれに火をつけて、その煙をあんたの子供たちと一緒にお浴びなさい。事態が好転して、余裕ができたら、白い鶏と米をお買い（ムズカに捧げるための)。ムズカだよ。ただのムズカ。
C: 誰かがわざと置いてきたの？
D: お前が子宝に恵まれているばっかりにね。妬みだよ。というわけでコウモリはムズカなのさ。
C: コウモリがバタバタ。そればかりか一昨日なんて、他のも一緒にやってきたのよ。なんなの、これっていったい。
D: ただのムズカだよ。私は妖術は見なかった。私は妖術についてお前に語るつもりはないよ。でも、ムズカに行って、事を済ませなさいな。

奪われた汚れを取り戻す際には施術師の助けを借りることもできる。施術師は、「冷やしの

施術」を思わせる仕方で、「冷たい木」の薬液で患者を洗うことによって「悪い汚れ」を取り除き、次いで近くのムズカまで患者と同行しムズカへの語りかけ方を教えて、患者が「汚れ」を取り戻す手伝いをしてくれるだろう（註 冷やし）。しかし施術師の援助はけっして必須ではない。基本的に、他人の汚れを奪ってムズカに置くことも、奪われた汚れを取り戻すことも、個人で実行可能なDIYな施術なのである。
さらに、奪われた汚れが敵によってどこのムズカに置かれていようとも、取り戻す際にはわざわざそのムズカを特定してそこに赴かなくてもよいと考えられている（これについては異論もあるが）。最寄りのムズカで行えばよいのである。まるでムズカが入り口となっている異界は、内部でつながっているかのようだ。
上に例を挙げた、遠方のムズカ・コンゴに「汚れ」を持って行かれた女性のケースについても、彼女はこんな風に説明している。
「あいつらはシャリフのムズカ（ムズカ・コンゴの別名）まで行ったかもしれない。でもお前はこちらのムズカの入り口で引き寄せることができるのさ。お前がこちらでしゃべると、ちゃんと向こうでも聞いてもらえる。わざわざ私はあっちまで行ったりしないよ。妖術使いは行ったがね。こちらにもムズカならいくらでもある。そこに行って、力を乞えばそれでいいんじゃないかい？実際もう近所のムズカに行ってきたよ。すっかり片がついた。」
妖術をかける側から言えば、ムズカにはさらに高度な利用方法がある。ムズカに自分の富や健康を願うことが可能であるように、他人の不幸や災いを祈願することも当然――とくにイスラム系の霊と結びつきのあるムズカでは――可能だと考えられている。しかしその場合、祈願者はムズカに対して健康などを祈願した場合よりもはるかに大きな負債を抱えることになると思われているので、単に他人の所有物をそこに持って行って置いて帰る――債務なしである――というのに比べると、誰もが気軽に試みるにはかなりハードルが高いことになるだろう。単に「汚れが奪」われただけでなく祈願の可能性もあるなら、治療においても施術師の関与が不可欠になるだろう。
実際の事例では、犠牲者が受けている攻撃が「汚れを奪」われただけであることは稀であり、それに加えてフュラモヨその他の妖術の攻撃も同時に受けていることが普通である。それゆえ「汚れを奪う」という攻撃はメインの攻撃に付随するマイナー・アタックとして眺められるのが普通で、それ自体が問題の焦点として語られることはめったにない。しかしこの観念は、可能な攻撃者の範囲を想像的に一気に広げるものであり、身近な友人や身内の間に潜む悪意をくっきりと浮き彫りにする。それは技としてはマイナーで取るに足らない行為ではあるが、それによって人々にとっての生活世界を、近隣の誰が実は妖術使いであると判明しても不思議ではないような社会空間にまさに変えてしまうという点では、実に重大な帰結をもたらしてしまう観念なのである。

結語

妖術の中には方向性の異なる三つのイメージが混在している。それらは妖術使いが行使するさまざまな術のなかに浮かび上がる。妖術使いはそれぞれ（１）自然物の利用法についての秘儀的知識に精通した特殊技術者であり、（２）人のあるべき姿から逸脱した異常者であり、（３）嫉妬と悪意を隠したありふれた近隣の知人・身内である。これらが同一人物の中に共存するというほとんどありえなさそうな話が、なんの不思議もなく実在する特定の人物の上に見てとられるということが、この観念のある意味でもっとも奇妙な特徴である。ある人物が妖術使いであると判明することは、その秘められた知識と技に圧倒され、そのおぞましさに嫌悪し、裏切りにショックを受けることである。いずれもが強烈な感情的反応を喚起する。人の身近な隣人の誰かを、唾棄すべき危険な存在に仕立て上げるために必要とされるありとあらゆる要素を、まさに総動員しているかのようである。とりわけ（１）と（２）に関しては、人々の想像力は執拗に、恐るべき勤勉さで考え付く限りの可能性を展開し、その詳細を微に入り細にわたって増殖させているかのように見える。本章で紹介したのはその一端である。

わざわざ断るまでもないと思うが、ここで思い描かれているような妖術使いが現実に存在しているわけではない。人々の語りの中で妖術使いだとされている具体的な諸個人が、ここで描かれているようなあんなことやこんなこと――ムハッソの使用から、夜の裸踊り、人喰いに至る――を現実に実行していたと考えねばならない根拠など存在しない。原理的には、特定の個人が妖術使いだとされるすべてのケースは、いわゆる冤罪であることになる。身に覚えのない個人の上に妖術使いのイメージが重ねられ、社会的に固定されてしまったものだ。後述するように、特定の人々が経験する災厄を起点にして、そうした身に覚えのない「妖術使い」が社会的に生産されていくプロセスが存在する。「原理的には」と書いたのは、実際には必ずしもここで描かれている妖術的振る舞いを実行しているような個人が皆無であるとは言いきれないところがあるからだ。社会は気のいい善人ばかりで成り立っているわけではない。誰かの死や不幸を願う不届き者も少なくない。そういう人間にとっては、犠牲者に気づかれることなく危害を加えるムハッソその他の妖術的手段は、大きな魅力かもしれない。もしかしたらそうしたニーズに応えるムハッソの闇マーケットなどもあったりするかもしれない。偶然手に入ったムハッソの知識を実際に試してみようと思う者が出てきたとしても不思議ではないのである。さすがに裸踊りや人喰いまでは誰も試してみようとは思わないだろうが、これとて皆無と断言することはできないだろう。というわけで、人々が妖術使いについて思い描いているような行為に実際に及ぶ人間が現に存在しうることになる。しかし、ほぼ確実に言えることとして、彼らが試してみたそうした行為が実際に意図した目的を遂げることはまずありえない。彼らが試みた妖術は、ほぼ100％不発に終わると考えて間違いない。不発に終わった攻撃についてわざわざ報告する者はいないし、それらが人々の語りの対象となることもない。

それゆえ、ここには二重の不在がある。自覚的に妖術的行為に及ぶナンチャッテ「妖術使い」が存在するところには、その犠牲者が存在しない。なぜなら彼らの行為に何らかの効

力があるわけではないからである。逆に、妖術の犠牲者であるとされる人々――現実の災厄――が存在しているところには、それらの災厄を引き起こされたとされる「妖術使い」が存在しない。それらは誰であれ人によって引き起こされたはずのない災厄だからである。妖術使いは事後的に、冤罪的プロセスによって作り出されるしかない。妖術をめぐる想像力は、その魅惑によって一部の人々をとらえナンチャッテ「妖術使い」を産出し、そのおぞましさと嫌悪によって災厄の渦中にある人々――および彼らに共感する多くの普通の人々――をとらえ冤罪「妖術使い」を産出する、と言ってもよいだろう（註 二重）。
描かれてきたような妖術的攻撃手段とその効き目が現実的可能性として考えられていることが、こうした魅惑と嫌悪の源泉であることは言うまでもない。それが単なるファンタジーや「お話」に過ぎないのであれば、人はそうした力を本気で手に入れようとしたりしないし、災厄の渦中にある人々はその背後にそうした手段を行使している実在の人物を見て取ろうとはしないからである。しかしそもそも、どのようにして妖術をめぐる諸観念はこの現実的可能性を手に入れているのだろうか。「妖術信仰」というインデクスの下にまとめうる信念の総体をかたちづくる、本章で紹介してきた諸観念や知識が単なるフィクションやファンタジーとしてではなく、現実の可能性として流通するような空間とはどのような社会空間なのだろうか。こうした一連の信念が、総体として繰り返しこの社会空間にとどまることを可能にする、どのような実践＝真理化のプロセスをともなっているのだろうか。仮にここで述べてきたような妖術使いが現に存在するということを前提としたときに、それは生活上のどのような戦略や実践につながり、そうした戦略や実践の展開がどのように当の信念体系へフィードバックされていくのだろうか。なぜ人々は妖術を信じることができるのか、信じているのか。この問いに向けて、妖術をめぐる信念が連動しているこれら実践系をつぶさに検討することが次の課題である。

註

（註 妖術話）実際には、現実に妖術の攻撃を受けたと考える当事者の身近な人々の間での会話においても、当の妖術使いの実名が出されることはまれである。「あいつ」「あの老人」などで居合わせた人々には誰のことを指しているのかわかるのである。あるとき私がこうした会話のなかで、確認の意味をこめて、「あいつってＮ老人のこと？」と尋ねたことがあるが、居合わせた人々は笑いながら「こいつ名前を言っちゃったよ」あきれたように言った。誰かが誰かのことを名指しで妖術使いと言っていたということが、噂であれ本人たちの耳に入ると、長老の集まりで訴えられる危険性がある。「誰それは私に妖術使いだと濡れ衣をかぶせている（ku-singizira utsai）。どのような証拠があってそう言っているのか。」と問いただされるのである。
（註 カヤ）施術師たちが彼らの力（薬）のもう一つの源泉として誇らしげに吹聴する場所＝時間は、ドゥルマを含むミジケンダの人々にとっての過去の神秘と栄光の場所であるカ

ヤの森である。ドゥルマの施術師たちは、自分たちの薬が隣接するギリアマ人のかつての要塞村でありかつ儀礼センターであったフンゴのカヤ（Kaya fungo）に由来するものであることをしばしば誇示することがある。

（註 ダワ）「薬」をこうした医薬品と、この地方の施術師によって用いられるそれ以外の薬に分ける言い方がある。前者を「政府のダワ（dawa za serikali)」、後者を「土着のダワ（dawa za chenyezi)」と呼ぶ呼び方がそれである。これは西洋近代／土着の区別に着目した区別であり、ムハッソは後者の一種だということになる。この場合、土着のダワには、単純な誰でも自家処方できる薬草の類や、狩猟などで用いていた毒なども含まれる。

（註 三角形）ムヒ（薬）の３タイプは、必ずしも３つのタイプの治療において排他的ではない。「冷やし」を専門にする施術師であれ、憑依霊を専門にする施術師であれ、なんらかのムハッソを使用する場合があるし、材料を生のまま利用する薬液も、３つのタイプの施術のいずれにおいても用いられる場面がある。しかし、それぞれの施術でどれが中心的な処置において用いられるかに関して言えば、その違いははっきりしている。たとえば、妖術による災いを治療する施術において中心となるのは黒い粉ムハッソによる処置であり、薬液は治療の最終段階で、患者の汚れを取り除き冷やすのに用いられるといった具合である。

（註 カウマ）カウマはドゥルマと同じミジケンダの９集団の一つである。

（註 魅惑）これらの話のなかで妖術使いとして語られるのが、話しての身内ですでにこの世にいない人物である場合はなおさらである。Ｃ氏の変身譚については、それが語られていたのはＣ氏の存命中で、当時Ｃ氏は別のもう一人の老人と並んで、この地域でもっとも厄介だと思われ、厭われていた妖術使い被疑者であった。この話自体は、むしろＣ氏の妖術を知恵と勇気で跳ね返したＫ氏の自慢話として聞かれるべきものだろう。

（註 誘惑）この手の話を作り話ではないかと思う読者も多いだろう。私自身、こうした話を聞かされるたびに、それが本当にあったことなのかどうか何度となく疑わしく感じてきた。しかし人が物語ることを、つねに事実についての報告として捉えることは適切だろうか。裁判の証人席ではないのだ。人の語りはつねにパフォーマンスで、そこでは語り手は自分がどういう人間であるか、自分の人となりや、欲望、人生への姿勢を提示するために語ってもいるのである。実際にあった事実の忠実な報告かどうかだけに目くじらを立てるのは、的外れなのかもしれない。Ｂ氏の語りの真実は、富と人生の成功を求める若者であったＢ氏自身にとっても、一時は切実であったムハッソ使用の誘惑のリアリティにある。仲間と強力なムハッソを求めてタンザニアへ旅したことは実際の体験であったのかもしれない。そしていざ実際にムハッソを手に入れる段になって、尻込みしたことも。木の根を切断して施術を完了させることが、同時に大きな代償をＢ氏が支払うことを意味していることが了解事項であった場合、その木の根に母親の顔が実際に現れたかどうかなどということは、単なる些細な――しかし確実に話にいっそうの魅惑と訴求性をもたせる――ディーテイルにすぎない。

このエピソードはまた、後述する「キブリの妖術」についての共通知識を背景になりたっている。このエピソードを聞けばこの地域の人々なら誰もが、この施術師がまぎれもなくキブリの妖術使いで、彼が木の根のところにキブリの妖術の一種を使って呼び寄せたのはＢ氏の母親のキブリに他ならないことを理解する。またキブリは切断されるとその持ち主を死に至らしめるというのもその背景知識である。

（註 自称）実は、自分が妖術使いであるとまでは言わなくても、人に危害を加えるムハッソを使役することができるとほのめかす者は存在する。彼らは、それを周囲の人々を威嚇し、恐れさせる目的でほのめかすのであり、ある程度は期待した効果をあげる。しかしこれはその男にとっては、最終的には非常に高くつく賭けである。彼は人々の間での病気や死に際して告発されるリスクを高め、後述するように何年かに一度のペースで勃発する地域あげての妖術使い狩りでターゲットにされてしまう危険を冒していることになるからである。にもかかわらず、周囲の人間に自分を恐れさせるという目先の効果につられて、こうしたこけおどしの威嚇を行う者が皆無ではない。だからといって、彼らが実際に妖術のムハッソを持っているということではないし、仮に持っていたとしても、その使い方などを聞いたところで答えてもらえる可能性はまずない。また、後に論じるように、これだけムハッソについての話が流通していれば、誘惑に駆られて実際にムハッソを手に入れ、それで憎い相手をなんとかしてやろうと思う者たちが出てきたとしても、まったく驚くにはあたらない。そしてそうした要望にこたえる闇市場があることにも、私はうすうす気づいている。だが、彼らは逆に自分がやろうとしていることを人に知られぬようひた隠しにするはずなので、同様に、情報源にはなりえないのである。

（註 木の名称）これらの「木」の名前は、「施術上の名前（dzina ra chiganga）」であり、その植物が一般の人々にその名で知られている名前ではない。したがって施術師がムサヴラと呼ぶ木が、ブッシュに生えているどの木のことなのかは通常の人には知りえない彼らの専門的知識に属する。

（註 購入履歴）ムハッソやその成分についての知識が、代金を払うことによって誰から誰に与えられたのかについての来歴が唱えごとの中で詳しく語られることには、後述するように大きな意味がある。代金を払って正式に購入しなければ、人はムハッソをコントロールすることはできない。盗んだのではなく、ちゃんと代金を払ったと告げることで、ムハッソにその施術師が正当な主人であることが示される。彼の発するコマンドが有効になるのである。施術師のある人々が、施術を自分自身やりたいというわけではなく「単に言葉（maneno）として知りたい」のだと表明する私のような者に、安心してその成分や呪文を教えてくれるのは、私がこうした対価を支払わない限り、そうした知識だけでは私はムハッソにその効果を発揮させることができないことがわかっているからである。

（註 瞳）多くの人は、瞳を覗き込むとそこに人の姿が見える、それがキブリだというが、これはどう考えても覗き込んでいる人の反射像で、光線状態にもよるだろうがたいてい見えるはずだ。懇意にしている施術師数名によると、彼女らは瞳のなかにきらめく光の反射

のようなもので判断している風である。また別の施術師によると、キブリを奪われた人の目を覗き込んでも、そこに施術師の影は映らない。目の前で手を振ってみても、瞳の中には何も映らないのだという。

（註 キブリ治療）妖術に対抗する施術は、ほとんどの場合近隣に知られぬよう密かに行われるので、そもそも立ち会う機会は少ない。数少ない懇意にしている施術師に同行するか、調査者と特に親しい――たいていは調査者が身を寄せている屋敷内部の患者や、屋敷の人々の親族の一部にほとんど限定される――者が施術の対象になっている場合、あるいは稀なことだが、調査者が施術の資金援助をしている場合――これも多くは金だけ出させられて施術は調査者には告げずにこっそり行われてしまったりするのだが――、あるいはさらに稀なことだが、まったくの偶然で訪問した屋敷でまさにその施術が行われようとするところに遭遇する場合くらいしか、施術に立ち会うチャンスはない。とはいえ、深刻さにおいては同様な他の施術（たとえば後述するフュラモヨに対する施術）のなかには、飽きてしまうほど何度も立ち会ったものがあることを考慮に入れると、キブリの施術の頻度自体が少ないのだと判断してよいと思う。自信はないが。

キブリの瓢箪を用いたとされる妖術とその治療施術そのものにとってかわったものとして、鏡や、椀に張った水の中に殺したい相手のキブリを呼び出して、それをナイフで切るという妖術が話題になっている。この妖術は、海岸部のイスラム教徒やタンザニアの施術師が得意なのだという。

（註 ジェネザ）死者は小屋の中で全身の毛を剃られ、洗われて白い布に包まれ、寝台を逆さまにし周囲を腰布でしっかり覆った輿に乗せられ、６～８人の若者に担がれて埋葬地まで運ばれる。

（註 キブリ殺害）殺害するというと穏やかではないが、施術師の場合には実際のところ以下のようなことなのではないかと、私は考えている。ムハッソやムヒのなかには、それを入手すると身内に死者が出ると考えられているものがいくつかある。「冷やしの施術」つまり屋敷の秩序修復の施術に関係するムヒにもその手のものがある。「死の施術」として知られている死者の埋葬や服喪明けの手続きにかかわる施術は、それを獲得すると、配偶者に死なれてしまうと言われている。それゆえ、すでに配偶者に死なれた者だけが、その施術を学ぶことができるとされている（浜本 2001:375）。キブリの施術の場合は、それを獲得するためには親族を殺さねばならないので、この「死の施術」とは前後関係が逆になっているように見える。しかし、実際には似たようなもので、近親者に死なれたばかりの者がそれを機にキブリの施術を入手しようとするということなのかもしれないし、あるいは、キブリの施術を入手する者は、その瓢箪を用意しつつ、近親の誰かが死ぬのを待って、その瓢箪を完成させるということなのかもしれない。キブリの施術師と知り合いになって、ぜひ尋ねてみたいところである（おそらく答えてはもらえないだろうが）。

（註 治療結果）私が偶然居合わせたこの施術の結果、患者は幸運にもその後健康を取り戻した。高額治療の甲斐があったわけだ。もちろん施術が患者に回復をもたらさないことも

あるという。その場合は、患者はキブリを奪われただけでなく、別の形でも攻撃を受けていたのだということになり、さらなる治療が求められるかもしれないし、別のエージェントの関与が疑われるかもしれない。
この施術は、キブリの妖術の治療のもっともよく知られたやり方であるが、キブリの妖術の種類によっては別のやり方がとられることもある。ムコモの場合、患者はブッシュの中に墓穴のような穴を掘り、その中に死体を包む布で巻かれて横たわる。施術師の合図で彼は墓穴から忍び出る。居合わせた人々は彼を見てはならない。ついで彼は木を組んでその場でしつらえられた台の上に、再び死体を包む布をまとって横たわる。そしてその周りで人々は埋葬を待つ死者に向けて歌い踊られるムセゴを演奏する。その後、彼にキブリが戻される。死から埋葬にいたる流れを逆回しにして見せている。もちろん話して聞かされただけで、この治療を実際に目撃したことはない。
（註 フサ）祖母は、この孫息子（彼女の死亡した娘の息子）が実際に盗みを働いたかどうかに関してはなんの疑いも持っていなかった。もちろん盗んだのである。彼が逮捕されるまでの一週間あまり、彼女はむしろ彼の盗みに対して、店の所有者が呪詛（後述）を打ち、それによって彼女の属する母系集団が死に絶えるのではないかと真顔で心配していた。しかし言うまでもなく、身内を護るためにはあらゆることをせねばならない。フサは、同様な状況でのほとんどのドゥルマの人々にとってと同様に、当然の手段であった。この近隣にいるフサの施術師Ｍｒ氏は、ドゥルマの男には珍しく物腰が柔らかく礼儀正しい老人で、そのあまりの腰の低さに私自身とまどったほどの人物であった。しかし、にもかかわらず、彼は近隣の人々から妖術使いだと看做されていた。明らかに彼が所持する多数のムハッソ、とりわけフサのムハッソの故である。実際、2006 年にこの地方で起こった妖術使い狩り運動のなかで彼は捕らえられ、その正体を暴かれたと聞いている。
（註 ツァムラ）実際、上述のツァムラを、後述するフュラモヨの一種であると語る人もいる。
（註 フカラ）こんなことはありふれたことだ。俺だってそうだとおっしゃるあなた、あなたはもしかするとすでにこの妖術にかかっているのかも。
（註 ムコネ）ムコネはドゥルマで「冷たい木（muhi wa peho)」と分類される、「冷やしの施術」で広く用いられる木で、実をつける雌の木と実をつけない雄の木の二種類がある。ムコネ・ウチェは雌のムコネである。
（註 ドゥワ）ドゥワの妖術は、どんな種類の妖術があるかという質問に対して、人々が真っ先に挙げるいくつかの妖術のなかに入っており、冒頭のパラグラフで紹介した程度の説明を多くの人が行う。ドゥワの術にかけられる（ku-pigbwa duwa「ドゥワを打たれる」）という表現は、日常でも妖術の噂――誰某の生活がめちゃくちゃになっているのは妖術のせいだという類の――でもよく耳にする。しかし現実には、人々がドゥワに言及するケースの多くも後述するフュラモヨとして処理されていることが多い。施術師のなかにはフュラモヨを治療する際に、ドゥワも一連のフュラモヨの一種として唱えごとの中に組み込んで

しまっている者もいる。
（註 ムハッソ）すでに説明したように、病気やさまざまな災難について、単に「ムハッソだ」と言えば、それが妖術によるものであると述べていることになる。
（註 自己嫌悪）フュラモヨという名の憑依霊や、自己嫌悪（dzimene）という別名をもつ憑依霊がおり、それらの霊に憑依されると、同様な症状を示すとされている。
（註 ンザイコ）人によってはンザイコをフュラモヨの種類の一つとして挙げる者もいる。その場合、全身が何かに這い回られているように痒い、心臓が破裂する、などの症状が強調される傾向がある。
（註 ムァンバニャマ）これらの名称に使われている言葉の多くは、直接症状を指す言葉である。ガンジ（ganzi）は「痺れる」を意味するクファ・ガンジ（ku-fa ganzi）に由来する。ムコモはキブリの妖術の一種の名前であるが、それが引き起こす出血という症状から、ここで用いられているのだろう。カンジョンジョ（kanjonjo）については意味不明である。ムァンバニャマは草の一種で、この草の汁に触れると痒くなることから。
（註 ボラ）他にボラと呼ばれる者に、母系集団の女性たちが管理するキフドゥ（chifudu）とよばれる壷をめぐる施術があり、彼女らもボラと呼ばれる（浜本 2001:104, 267）。キフドゥのボラと同様に、バハシのボラも一種の結社をなしていた。またキフドゥのボラと同様、その死に際して特別なやり方に従う必要があった。ボラが死んでも、通常の死の場合と異なり、親族たちはただちにその死を泣き悲しむことが禁じられていた。他のボラ仲間が集まり、死体の周りで竹（mwanzi）で作ったムァンザ（mwanza）と呼ばれる笛の演奏を行い、それによって親族の号泣が許される。
（註 母系）ドゥルマは、ミジケンダ・グループのなかではラバイとともに二重単系出自にもとづく親族組織をもっていることで知られている。1950 年代までは、主要な財産である家畜や現金などはすべて母系の継承ラインで相続されており、父系的に相続されるのは弓矢などの武器と当時は希少資源とは考えられていなかった土地のみであった。もっとも当時土地の個人所有の観念はなく、土地は父系クランが所有しており、ここでいう相続は父親が開いた土地を引き続き占有できるという程度の意味で、個々人はいくらでも新たにブッシュを開いて農地を手に入れることができた。1960 年代に相続がすべて父系に改められた結果、今日母系集団が問題となる場面は、殺人の賠償――これも今日では関与する人々の範囲は狭まり、広い範囲の母系集団が関係してくることは稀である――や、フドゥの壷が送りつけてきた病気の治療、そしてこのキラボにおいてのみである（浜本 2001:30-32）。
（註 インド人）実際、インド人の商店主がキラボを打つとは考えられない。しかしメンザゼが軽い愚痴としてぼやいてみせただけなのか、インド人であるとドゥルマ人であるとを問わず、キラボの普遍性を想定していたのか、今となっては不明である。
（註 自白）キラボ解除の要求に対して、自分はキラボを打っていないと言い張ると、かえって立場がまずくなる。彼にキラボを解除する気がなく、その母系集団全員の死を本気で望んでいるのだと解釈されてしまうからである。キラボを打つことは許される行為だが、

賠償の受け取りと解除を拒むことは邪悪な振る舞いである。
（註 畑）「キラボよ、畑へ行け（enda shamba）」と言う代わりに「キラボよ荒地に行け（enda nyika）」と言ってもよい。「畑（あるいは荒地、あるいは海原）に行って野生ブタやイボイノシシ（あるいはシマウマやエランド、あるいはカジキ）等を食べよ」、つまり私には何もするなという、ムハッソに対する唱えごとの常套句の後半を省略したものである。
（註 バコ）この発言のどこが人を恐れさせる呪詛になるのかと疑問に思う方もいると思う。私自身も、あまり良くわかっているわけではない。ただ、この点について人々に説明を求めると、人間には自分の未来のことなどわかるわけがないのに、なぜかれは未来について確信をもっているのだろう、という説明が多い。「お前が明日もまた生きているのを見るのが楽しみだよ。（Ninakurorera kumba machero undasagala mumu）」「お前はきっとこれからも誰にも負けないくらい順調だろうよ。（Ninakurorera undaenderera mumu kudzidimwa we.）」などは、その典型だろう。ただ未来の話をすれば、それがすべて呪詛的にとられるというわけでもない。良い未来を語っていても、それが怒りの文脈で語られているところに恐ろしさがあるのだ、という見方も――これはドゥルマの人々の解釈ではないが――なりたつかもしれない。もちろんバコととられる発言のなかには、「太陽が沈むとき、お前も折れる（dzua ritoke, nawe utoke.）」といった破滅を直接予言する発言もある。
（註 生得的）なかには生まれつき他人にバコを打つ能力をもった人物、あるいはむしろ、その発言が本人の意図には無関係にバコになってしまうような人物がいるという。近所に住んでいた娘で、気立てもよく美しいのに（私の主観だが）20 歳を過ぎてまだ結婚していない娘がいた。近所の青年からふとした機会に、彼女がそうした人物の一人であると聞かされた。舌の先に黒い色素が沈着しているのが、そのように見られているらしい。彼女に相手に危害を加えるつもりがなかったとしても、相手と言い争いになってつい口にした悪い言葉が、相手に危害を与えてしまうのだという。彼女は、その後モンバサの秘書を養成するカレッジに通い、ディストリクトの首府で定職につき、そこで別のエスニックグループ出身の青年と結婚して、幸せな家庭を作っている。
（註 ムフンド）夫と妻の間でも互いにムフンドを持ちうるという見解も広く見られる。兄弟同士の間の悪意や憎悪がもたらす災いはチャカ（chaka）と呼ばれ、これは争いあう兄弟が食事を共にすることで解消できる（浜本 2001:173-4）。これらは同様に関係そのものに内在する憎悪や怒りの効果である。また広く共同体の人々全般の不興を買うことによって人に災いが起こりうるという観念もあり、これはラナ（lana）と呼ばれているが、この言葉は呪詛や非難を意味するスワヒリ語 laana ――「呪詛する、非難する」（ku-laani）から派生した名詞である―― をそのまま用いているのだと思われる。
（註 ペンバ）タンザニアのインド洋上の島でアラブ人によるクローブ・プランテーションがあった。ドゥルマの人々はそこをイスラム系妖術の中心地と考えている。
（註 膨満）腹部が膨満して死ぬ病は、ドゥルマでは「悪い病い」に分類されており、それによる死は「悪い死」として屋敷全体を「冷やす」施術の対象となる。浜本 2001 第 12

章参照。
（註 ウングリジ）富を自らの「汗（jasho)」によって追及することは賞賛に値する。他人の努力の産物を掠め取る行為は、窃盗であれ、妖術であれ、忌まわしい所業である。他人の畑の収穫を掠め取るウングリラ（ku-ungurira）と呼ばれる妖術が知られており、用もなく他の人々の畑を徘徊すれば、妖術使いの疑いを招いてしまう。もっとも、掠め取る相手が異部族であれば､それはごくありふれた収穫前の豊穣施術の一部として行う人々も多い。自分の畑に行ってトウモロコシに薬液を振りまきながら｢カンバ人の畑のトウモロコシも、タイタ人の畑のトウモロコシも.....私の畑にやってこい｣と唱えるのである。隣人の畑に対するウングリラはおぞましい行為であるとされているが、自分の子供を犠牲にして自分ひとりの富の増殖を追及するキザの妖術のおぞましさはその比ではない。キザの妖術の観念のせいで裕福な屋敷は、その屋敷にとっては不幸な出来事であるはずの障害をもった子供の存在によって、逆に近隣の人々の不審の念をかきたててしまうことになる。実に残酷な想像力である。
（註 悪魔）1990 年代半ばからケニアでは「悪魔崇拝」の浸透が公に論じられていた。ケニアの富と活力の流出をもくろむ IMF や世界銀行をも含んだ国際的陰謀が、悪魔崇拝という形でケニアの支配層や、学校の若者たちの間に浸透しているという噂で、1995 年には当時のモイ大統領自ら悪魔崇拝に対する非難の声明を出し、大統領の命令により悪魔崇拝を調査するキリマ大司教を委員長とした公的委員会が組織された。モイ大統領が調査結果を非公開としたため、噂はさらに膨らんだ。調査結果の一部は 1999 年に公表された。それによると「悪魔崇拝者たちは通常、高価な自家用車を乗り回す裕福で著名な人々であり、中には大企業の所有者も」いた。それは全裸で参加する彼らの夜の集会や、新入会員の血の儀式についても触れられている。報告書は「提示されたすべての証拠から判断し、委員会は悪魔崇拝祭祀は学校制度や社会全体にわたってケニアにたしかに存在しているという意見である」と述べてい（Weru, 2010)。国際社会の干渉と圧力のもとで発生した、モイ大統領を頂点とした政府中枢部の妄想が、多くのケニア人の想像力と反響しあった結果であると言えるかもしれない。しかし、キリスト教徒が依然としてマイノリティであるドゥルマの人々のあいだでは、1990 年代には「悪魔崇拝」の観念は表だって流通しなかった。2007 年のモバイル経由での誘惑の話が、私がドゥルマの人々がこの話題を持ち出すのを耳にした最初である。悪魔崇拝の噂はずいぶん遅れてこの地域に到達した。
（註 正体）施術師のなかでも「祈願の施術師（muganga wa kuvoyera)」と呼ばれる特別な者は、妖術使いの正体を見破ることができる。妖術使いは彼の夢には正面を向いて現れるので、誰であるかがわかるのである。この地方で間歇的に発生する抗妖術運動（妖術使い狩りの形態をとることもある）を率いる形になる施術師はしばしばこのカテゴリーに属する者である。
（註 ルンゴ）ルンゴ（lungo）は日常生活で、臼で搗いたトウモロコシの粒と薄皮をふるい分けるのに用いる、箕（浅い編み籠）である。服喪期間中のキフドゥを演奏する際に、

この箕の中に小さく砕いたガラスの欠片を入れて、それをゆすって音をだす。
（註 モスク）イスラム教徒のたいしていないこの地域にモスクが建てられることになったのは、1990年代に入って盛んになったアラブの援助によるモスク建設運動の一環であった。モスクが来ると水道その他の「開発」がもたらされると考えた地域の人々はモスク誘致に力を注ぎ、この地域でも二つの村（近隣集団）の間で激しい誘致合戦が行われた。援助組織の視察があるときには、人々は白い長衣を着てにわかイスラム教徒となって集まり、いかにイスラム教徒の数が多いかをアピールした。その甲斐あって、私の小屋があった「ジャコウネコの池」村にモスクが建造されることになったのである。モスクに派遣された最初の導師はポコモ人だった。ケニア海岸部北部にいるポコモは、ミジケンダと文化的に極めて近く、起源伝承を共有し言語的にも近縁関係にある。
（註 裸踊）閉め切った部屋の中にいたのに何故二人がこうした格好で踊っているのがわかったのかというのも、また同様に無粋なつっこみである。この場合は、語り手は自分自身の経験を語っている。このポコモ人のイスラム導師が、ひとり地域の人々の間に住んで、自分に向けられたある種の敵対意識を感じていたということはありうる。自分が妖術使いの攻撃のターゲットになっていると感じたとしても不思議ではない。彼が語ったこの話は完全な嘘っぱちではないかもしれない。なんらかの恐ろしい経験を彼が持ったという可能性はある。ただ、明らかに彼はそれを脚色・誇張して話しているし、この彼の話の主眼がイスラムの霊力（？）の強力さを強調することであることも、イスラムの普及伝道を職務とする彼の立場を考えれば納得のいく話である。
（註 オンドレラ）相手が眠っている間に性交することをドゥルマ語でクォンドレラ（ku-ondorera）というが、それ自体忌まわしい行為と考えられている。妖術使いだけでなく、憑依霊の中にも夢の中に現れて犠牲者と性交する者がいる。ペーポムルメ（pepo mulume）、ツォヴァ（tsovya）などが代表的である。
（註 ムァミンバ）ミンバ（mimba）はスワヒリ語で妊娠、あるいは胎児を意味する。ドゥルマ語では「妊娠する」ことはクヘンダ・トゥンボ（ku-henda tumbo）、クカラナ・トゥンボ（ku-kala na tumbo）という表現の方が一般的である。ムァミンバにかかっているとされる女性患者の治療に数回お供したことがあるが、癌の末期にしばしば見られる、腹水がたまっている状態であるように思われた。
（註 カファラ）カファラ（kafara）（マカファラは複数形）はスワヒリ語で「動物供犠、捧げ物」などを意味する言葉であるが、ドゥルマ語ではもっぱら妖術使いが攻撃の一環として犠牲者に対して送りつけてくる物を指す。
（註 ギリアマ）私の調査地から200キロほど離れたギリアマ地域で調査している慶田氏によると、ギリアマで、妖術使いが問答無用で殺されているなどというのはまったくのデマであるとのこと。
（註 実証）実証主義という我われにとっての幻想は、事実についての報告と、それが報告している事実とは常に原理的に照合可能であるという想定に立っている。しかしこの想定

は、現実の社会空間においてはめったに実現しない。言説空間を構成しているこまごまとした約束事を切り裂く一種の権力のみが、この想定を現実に近づけるだろう。後に詳しく論じるように、妖術についての語りが流通する言説空間の特殊性が、ますます照合可能性を低くしている。ある特定の人物についての妖術使いの嫌疑は、妖術使いと噂される当人と、彼に近い人々にそのことが知られることのないように、細心の注意を払って、そうした可能性が排除されたコミュニケーションネットワークの中でのみ話題にされる。妖術話の渦中の人物に、出来事をまさに妖術のタームによって尋ねることは不可能なのである。私は他地域の妖術使いたちの噂は、しばしば実名付で容易に聞かせてもらうことができた。しかし私が調査している近隣集団で誰が妖術使いだと考えられているかは、その地域で調査を始めてから 10 年以上たって、はじめて徐々にわかってきた。1983 年以来、もっとも親しく付き合ってきた一人の老人が、妖術使いの嫌疑をかけられている重要容疑者の一人であると 1997 年に初めて知ったときの驚きは忘れられない。

（註 コーン）コーンの大作そのものの目的は、魔女や異端についての言説の大まかな共通性よりは、１６世紀の魔女狩りにおける魔女に関する言説の具体的詳細の系譜を丹念に明らかにすることにあるので、そこでは紀元２世紀にさかのぼるこの伝統が、初期の教父たちによって文書化され、それが繰り返し写し書きされていく過程にも大きな強調がおかれている。

（註 雨乞い）天空神ムルングを怒らせるものとしては、ドゥルマのカレンダーで 4 日目ごとにめぐってくるジュマ（jumma）と呼ばれる休耕日に畑を耕す行為、人の死体を埋葬せずに放置する行為などがある。かつては雨乞いは７人の人々（4 人の閉経期を過ぎた女性と 3 人の施術師）によって日暮れ時に執り行われていた。彼らはいずれも黒い（濃紺の）ムルングの布を腰に巻き、頭には同じ布をターバンのように巻いていた。ムズカの森の中には小さな小屋が立てられ、その屋根には赤白黒（濃紺）の３切れの布が結びつけられた。灰で作ったケーキ（mukahe wa ivu)が用意され、羊が屠殺され、その頭部が地中に埋められ、壷がその上に置かれる。ついで、山羊が屠殺され、最後に牛が屠殺される。一羽の黒い鶏がムズカの森の中に残される。月経期の女性や妊婦、歯の生えていない赤ん坊はムズカの森には入ることができなかった。またムズカの周辺では、石鹸を用いて水浴びをしてはならなかった。ムコネの木の樹液を用いるか、水だけで行なわねばならなかった。また金属製のものを身につけることも禁止されていた。実際にこのようなやり方での雨乞いについて記憶している人々は 1980 年代ではごくわずかであった。

（註 匂い）常に人々の同意を得られ、何を喋っても傾聴してもらえる人を指して「良い汚れをもっている（ku-kala na nongo mbidzo)」あるいは「よい匂いをもっている」と呼ぶ慣用表現がある。逆に、何を喋っても聞いてもらえず同意もしてもらえない人については「悪い汚れをもっている」とか「悪い匂いをもっている」という言い方が用いられる。

（註 コンゴ）ムズカ・コンゴとはモンバサの南海岸にある有名なムズカである。

（註 冷やし）「冷やしの施術」は主として屋敷の秩序の乱れの矯正に関係しているが、そ

れは秩序の乱れによって不調をきたしている個々人の治療を含んでいる。この意味で、妖術から憑依霊にいたるほとんどすべての治療のなかに部分的に取り入れられている。「冷やしの施術」については（浜本 2001）を参照のこと。

（註 二重）ナンチャッテ妖術使いの攻撃に、まったくの偶然からターゲットにおける不幸が呼応し、さらにその不幸の下手人としてたまたま当のナンチャッテ妖術使いが告発される、などという信じがたい偶然がもし起こったとすると、それが人々にとっての妖術のリアリティにとっての衝撃的核になることはありうる。人々が語る妖術の実例の中にそういったものが紛れ込んでいることを完全に否定することはできないが、妖術のリアリティがそうした稀な偶然に依存していると考えることは現実的ではない。本章で紹介してきて妖術をめぐる諸観念は、後述するように、そんな偶然にたよらなくとも、現実を絡め取るための効率的なプロセスを内蔵している。

引用参考文献

Beidelman, T.O., 1963, "Witchcraft in Ukaguru," In Middleton J. & Winter H. eds., 1963, Witchcraft and Sorcery in East Africa, London: Routledge & Kegan Paul, pp.57-98

Cohn, N., 1973, Europe's Inner Demon: The Demonization of Christians in Medieval Christendom, revised edition, University of Chicago Press（邦訳『魔女狩りの社会史：ヨーロッパの内なる悪霊』，山本通訳，1999，岩波書店）

Geschiere, P., 1997, The Modernity of Witchcraft: Politics and The Occult in Postcolonial Africa, University Press of Virginia.

Jackson, M., 1989, Paths toward a clearing: radical empiricism and ethnographic inquiry, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press

浜本満，1991,「マジュトの噂:ドゥルマにおける反妖術運動」,『九州人類学会報』Vol.19: 47-72.

浜本満，1992a,「ドゥルマにおけるコマの観念」，『九州人類学会報』 Vol.20:33-51.

浜本満，1992b,「病気の表情」波平恵美子編『人類学と医療』(講座「人間と医療を考える」４），pp.70-93，弘文堂

浜本満，1995，「ドゥルマ社会の老人ーー権威と呪詛」，中内敏夫・長島信弘他編『社会規範ーータブーと褒賞』，pp.445-464，藤原書店

浜本満，2001,『秩序の方法：ケニア海岸地方の日常生活における儀礼的実践と語り』，弘文堂

Weru, G., 2010, 'Devil Worship Rampant in Schools,' Daily Nation June 13, 2010

Winter, E.H., 1963, "The Enemy Within: Amba witchcraft and sociological theory", In Middleton J. & Winter H. eds., 1963, Witchcraft and Sorcery in East Africa, London: Routledge & Kegan Paul